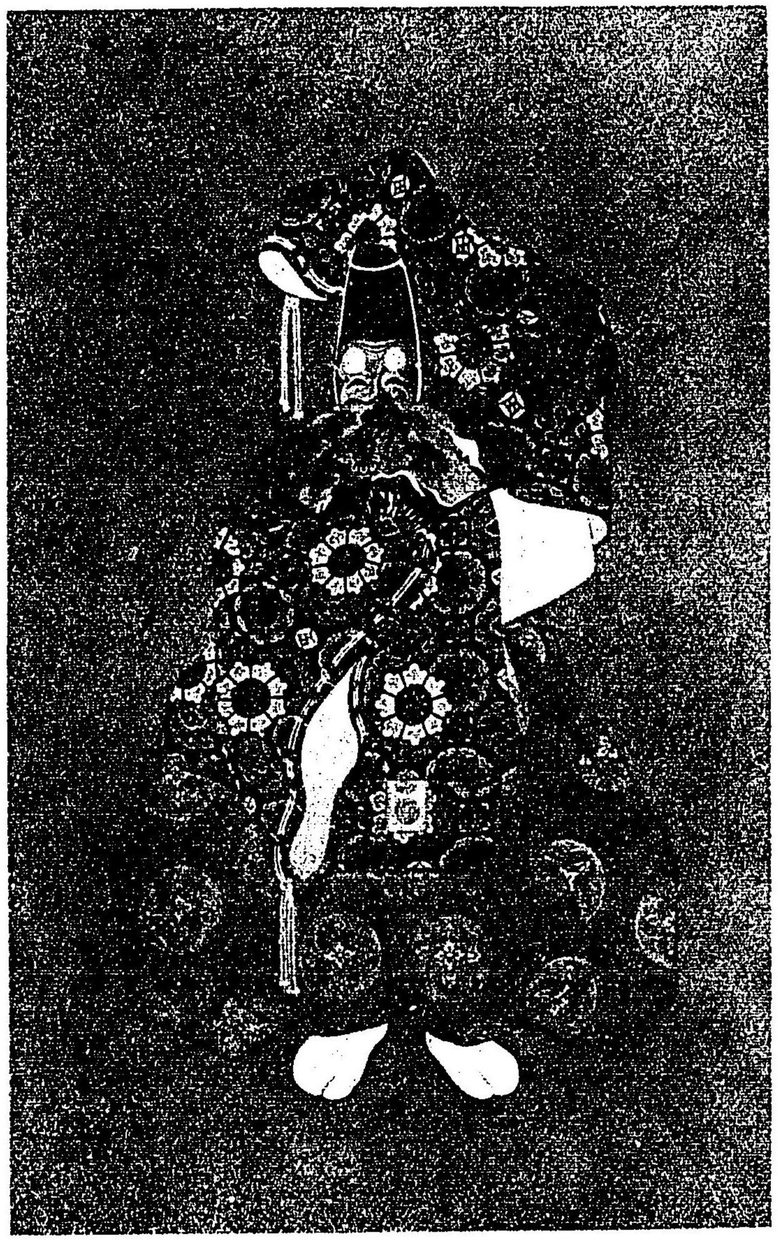
能楽スケッチ集

河合英忠画

明治
45. 2. 22

なきお



自序

今より凡そ十年程前、文界の名士として又能界の通人として知られた故大和田建樹君に連れられて藏前に梅若の能を觀たのが始めで、能のスケッチといふものを試ろみ出した、夫から以後は殆んど毎月の催ほし毎に梅若舞臺は勿論觀世宗家、喜多、九段能樂堂の舞臺など同君と共に觀て、而も觀る度毎にスケッチを作つたのが積り積つて此集を成したのである、此寫生中に登つた人で今は世を去つたものが多い、第一梅若實翁が逝かれた、續いて觀世鐵之丞老も居られない、觀世宗家の清廉君も世を早うして其美音名技に接する事が出來なくなつた、殊に予の師となつて常に指導を吝まなかつた大和田君さへも居らなくなつた、予に取つては此集は實に思ひ出が深いのである、此スケッチを描き始めたのも實は大和田君の勸めである、由來能の畫を描く人はあるがスケッチを作つたものはない、君の筆で試みたらどうかと云はれたのが元であるから、此集を同君に見せたら嘸喜こんでくれるだらうと思ふと追慕の念に堪えない、此集は五流の能を集めた積であるが中に梅若

の寫生の多いのは大和田君と一緒に多く梅若を觀たからである又一度新聞や雜誌へ出したのも加へてある要は同好者に觀せて若し誤寫があれば正して貰ひ度いのである。

明治四十五年二月

河合英忠

能樂スケッチ集

目次

一 高砂……一
一 羽衣……六
一 西王母……一〇
一 嵐山末社の間……一二
一 鐵之丞の氷室……一六
一 九郎三郎の鵜飼……一八
一 國栖……二〇
一 鷺……二三
一 大江山と草紙洗……二四
一 六平太の杜若……二六

一松風……二八
一萬三郎の木曾……三四
一萬三郎樂屋に入る……三六
一萬三郎の安宅……三八
一寶生新の安宅ワキ……四四
一夕顔山の端の出……四六
一萬三郎の定家……四八
一伴馬の朝長……五二
一金太郎の俊寛……五六
一小督……五八
一六郎の熊野……六〇
一六郎の清經……六四
一千手……六八
一六郎の盛久……七〇

一伴馬の盛久……七二
一織雄の吉野靜……七四
一吉野靜の間……七六
一大原御幸……七八
一道成寺(十種)……八四
一梅若父子の素謠……一〇四
一梅若實の卒塔婆……一〇六
一故觀世清之の翁……一一〇
一觀世紅雪の翁……一一二
一觀世清廉の技藝……一一四
一寶生新の壇風の脇……一一六
一壇風の新と貫五郎……一一八
一長の壇風……一二〇
一梅若萬三郎の遊行柳……一二二

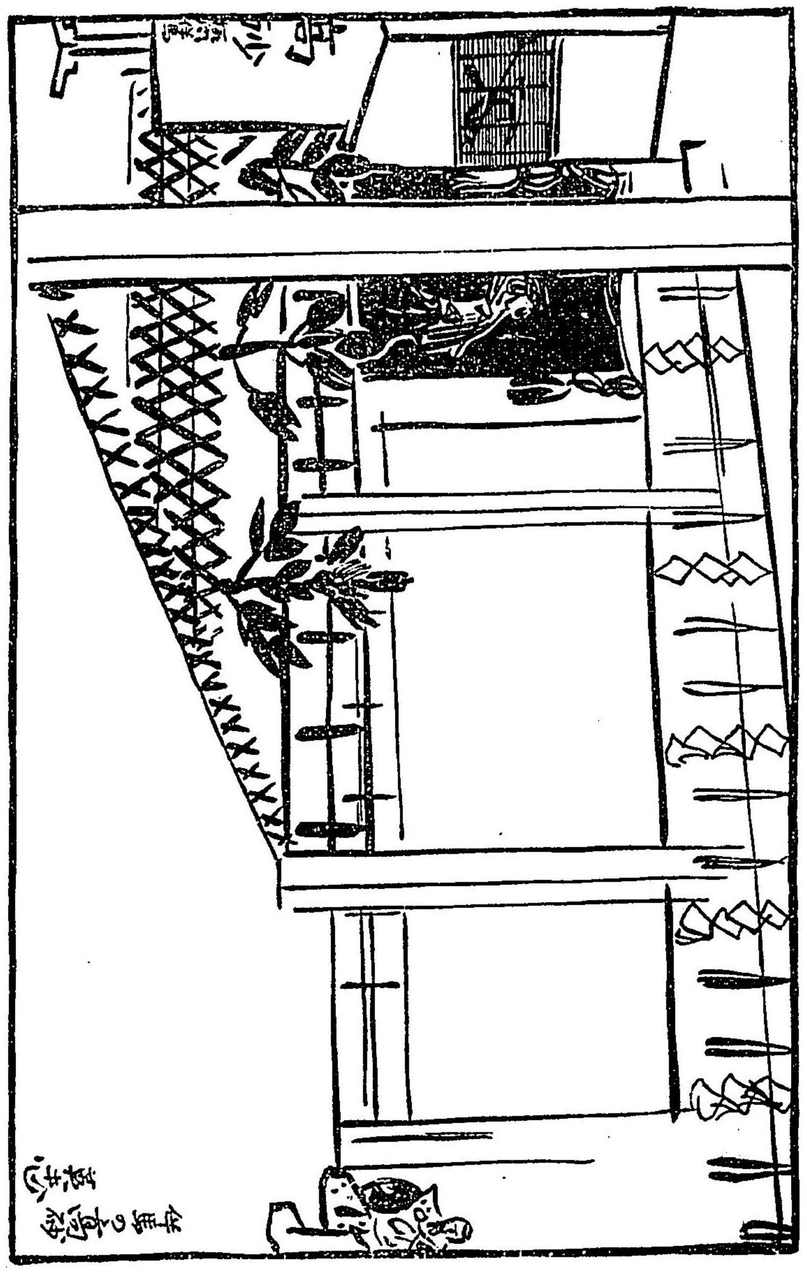
一萬三郎の融……一二四
一金太郎の融……一二六
一梅若六郎の砧……一二八
一六郎の角田川……一三六
一御幕……一三八
一シテの樂屋入り……一四〇
一萬三郎の仕舞……一四二
一伴馬の殺生石……一四四
一雨梅若の家庭……一五〇
一脇師のスケッチ……一五二
一素人能……一五四
一萬三郎集……一五六
一梅若美雄……一五八
一素人能……一六二

一見所の聞書……一七二
一萬三郎の安達ヶ原……一七四
一夜討曾我……一七六
一夜討曾我間狂言……一八〇

以上

目次終

能樂スケッチ集
河合英忠画

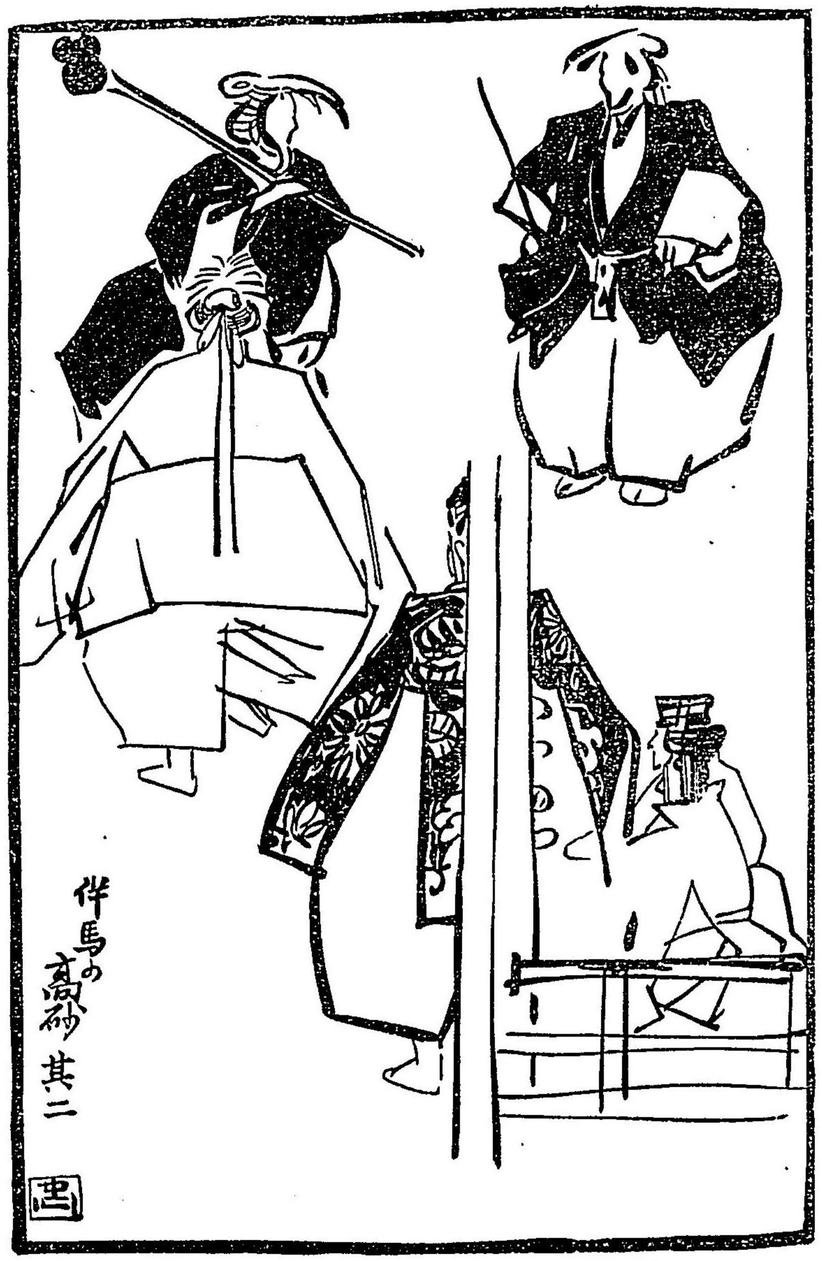


高砂（其一）

（四十年五月寫生）

高砂住吉の松のいはれを歌の心に取りて君ケ代の長久を壽ほぎ天下泰平を祝ふめでたき神能である、去れば正式の翁付の脇能として用ゐられ謠初の古式には四海波の章を謠ひ祝言の席上には此浦舟のくだりを吟ず。森嚴莊重の作意能樂二百番の筆頭に置かるゝ名曲である

（笑月）



伴馬の高砂（其二）

（四十年五月寫生）

此寫生は四十年の東京博覽會の時演藝館にて演せし物なり古畫にては松の作物を畫がきある物あれども今は觀世流にても用ひず、前シテは小尉の面尉髮厚板白大口コゲ茶色の水衣觀世にてはさらへとて。シテクマ手をもち。ツレ杉の葉を付けたる物をもつ金春はツレ同樣シテも杉の葉のつきたる物をもつ杉箒と言ふ畫面は觀世方まされりと思ふ

後シテは住吉明神面は。邯鄲男。透冠。黑垂。色鉢卷。白大口。狩衣コン地金丸物なぞあるもの多し　ツレ面は。姥。姥髮。白と黑の毛をませある物　葛帶コン卷。くすみたる物をもちゆ。水衣は多くうす物にて草色なり。箔。其外の模樣皆すきて寫る處たくみなる色彩せし絹地繪を見る如し

（英　忠）

羽衣

舞臺は今や羽衣の天女の舞　見所には品よき若夫婦の睦ましげに謠本を前にしての能見物、澄みたる平和の空氣はスケッチの畫面に漂ふて床しとも床し

（笑　月）

羽衣の一節

面白や天ならで。爰も妙なり天津風の雲の通日知吹とぢよ。乙女乃姿。しばし留まりて。此の松原の。春の色を美保がさき。月清見がた富士の雪いづれや春のあけぼの。たぐい波も松風も長閑なる浦の有様

觀世清久の西王母

ツレ青木　只一

（四十四年三月五日寫）

觀世家二十四世は此清久である。清久は能を何んでもすら〳〵やる樣であるが大いに注意を要すべき事だと思ふ、今が大事のところで有る、觀世宗家なる物は名のみの宗家でなく技倆の宗家と成つてもらはねばならぬ

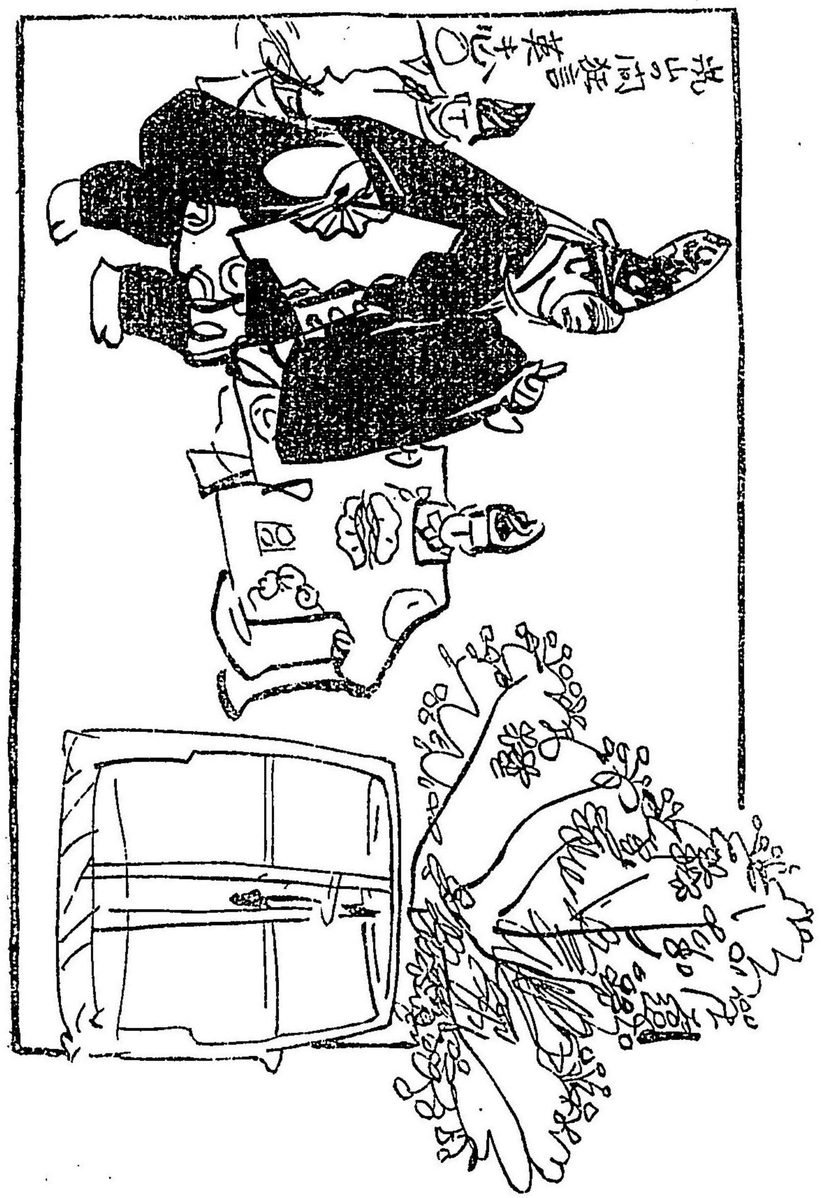
此西王母は畿報の記念能に勸めたのであるが、地も梅若、後見も梅若父子、ツレも梅門の青木であつた、

（英　忠）

嵐山未社間

未社間、とは加茂又は嵐山の如き神龍の間に、未社の神體が出でゝ祝ひ舞ふのである、石橋の間に仙人が出たり、紅葉狩の間にも神の使が出るがいづれも同形の物である古びた未社頭巾や。セピヤ色の上り鬚の面茶〻青色の水衣白茶の色狂言袴。ダブ〳〵の黒脚半、之れがまぢめくさつて舞ふのであるから何とも言得ぬおもむきがある　長い〳〵うどかぬ前シテなどに、かたのこつた時、此間狂言がうまく氣を晴らさせてくれるのである

（英　忠）



一曾銑二の嵐山

四十四年九月十五日
（梅若萬三郎氏談）

銑二は紅雪翁の内弟子でして、なか〳〵の秀才でしたが、惜しい事に早逝いてしました。此の嵐山を勤めましてから、舞臺へは二三度勤めたきりです、其の一度は小鍛冶其の次は熊、それで本年の裝束初めには岩船の仕手が付いて居りましたが、私が代はりを勤めました、くらいで其の後間も無く、歿しましたのです、

鐵之丞の氷室

（四十四年六月十八日の寫）

之は見なかつた。お耻かしい話だが一體氷室は今迄一度も見た事がない、どういふ譯かある度に見はぐれる。脇能の内でも較々重い方で、白髭や此曲などは見て置かなくてはならぬのだが、緣がなくて度々見損ねたのは殘念である。後見を特に寫生してあるのは良い、氣が利かない後見が舞臺の空氣を擾す事を、毎度腹立たしく感ずるので、見せしめにもなる

（雪　烏）

九郎三郎の鵜飼

（鵜の段）

（四十四年九月十日寫）

鵜籠を開き取り出だし、島つ淵おろし荒鵜ども、此河波にばつと放せば、おもしろの有様や、底にも見ゆるかゞり火に、驚く魚を追ひ廻し、かゞき上げすくひ上げ、隙なく魚を食ふ時は、罪も報も後の世も、忘れ果てゝ面白や、漲る水の淀ならば、生の鯉や上らん、玉島川にあらねども、小鮎さばしるせゞらきに、かだみて魚はよもためじ、ふしぎやな篝火の、燃えても影の暗くなるは、おもひ出でたり、月になりぬる、悲しさよ、

鵜船の篝影消えて、暗路に歸る此身の、名殘惜しさを如何にせん、

十日の觀世能
九郎三郎の鵜飼

國栖

（三十六年四月十九日梅若にて寫生）

天武天皇いまだ大海人皇子と申しゝ時大友皇子に襲はれ吉野の奥に忍ばせたまふ、老夫婦あり、密かに舟に載せて降しまゐらせたる故事即ち此曲の眼目たり、追手の武士に指をもさゝせぬ老翁の意氣凛として侵すべからず、老夫婦は即ち山神の化現なりけり

（笑月）

鷺

（三十六年三月十五日寫生）

神泉苑御遊の砌雪の如き白鷺一羽御側近く下る、法皇侍臣に命じて之を捉はしむ、鷺は宣旨なるを悟りて易々と捉はる、法皇御感の餘り直に之を放つ、鷺喜びて舞ひ去る、此能の舞は亂（みだれ）の秘曲ありて重き習事とす、故梅若實翁の舞振り今尚眼に殘りて鮮やかなりき

（笑月）

大江山と草紙洗

（四十四年七月六日）

右京の大江山を見て、幾もなく六郎の同じ曲を見た。右京のも面白かつたが、六郎のも美しかつた。此寫生は「天も花に醉へりや」の型かと思ふ。右京の「馴れてつぼいは山伏」の型の良つた事を思出す。鐵之丞の草紙洗の繪は「洗ひ洗ひて」の所に相違ないが、脇正面で舞臺の外から汲んだのが、面白かつた。少し前に見た六平太の同曲が麗はしかつた事も思ひ出す

（雪　鳥）

六平太の（杜若）

六平太の杜若

（四十四年五月二十五日）

五月

働人といふ小書があつて大分異つたものであつたが、實に良く出來た。此繪は一の松での型で「雲の上まで」の所と思ふ。此型の後に更に二の松に行き「暗きに行かぬ」を謠つた。「蟬の唐衣の」と名乗座先で躓づいて左の袖を返し右の扇で掬ひ上げる樣にしたのも珍らしく且つ鮮かだつた。普通の型は左の袖を兩手で擴げて見せる樣にすると記憶してる

雪鳥）

松風

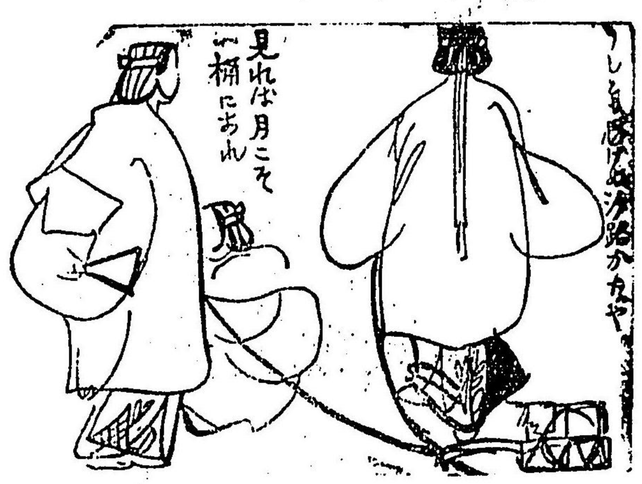
文の優雅、曲の婉娩、松風は實に謠曲中の人氣第一である、故清麗の美聲は今尚耳に殘り、六郎の艶姿常に眼に新たなるの觀あり資生流にては是を重き曲として政吉長の面々各特長を揮ふ、謠曲家が熊野と共に米の飯として賞美するも尤もである。

（笑月）

松風（其二）

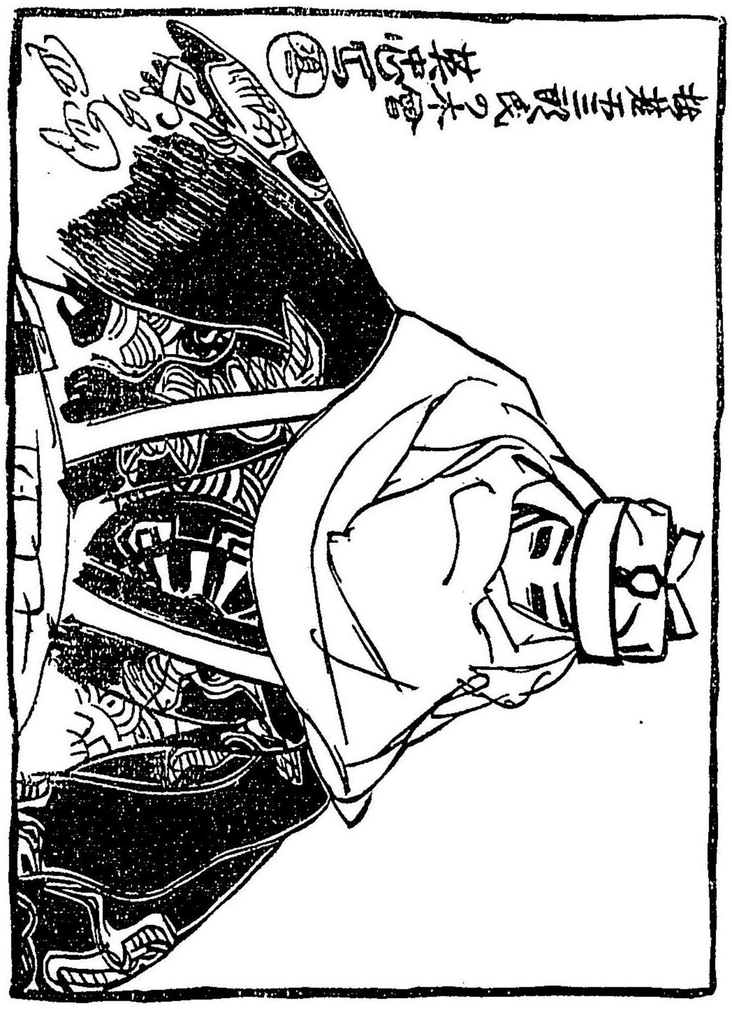
シテ。ツレ。橋掛りにて向き合ふ。二人共赤地に色々ぬひ有る腰巻して。白水衣の肩を高く取る。ツレ水桶をさげる。たゝ見る。橋掛りの青き松と。白き衣に赤き腰巻の、のこりなく寫りて。能樂中に裝束の色の配合よろしきを得たる物は松風が第一である。

「汐汲車わづかなる」「波こゝもとや須磨の浦」



松風の一節（其三）

松に吹くる風もきやうして。すまのたか浪はげしきよすがら。妄執の夢に見ゆるなり。我あととひて。たび給へ……



萬三郎の木曾（願書）

（四十四年九月二十四日）

此日は此木曾を見樣と、集まつた見物で能樂堂は滿員の盛況であつた、能はてきばきと片の附く早い物であるが、勇しい、いやみのない其上萬三郎が勸めるのであるから、意氣を付く間もないほどの能であつた、願書の讀み上げはいつもの美音に堂の中が、ビリ〳〵する樣に思はれた、男舞の早舞に至つては天下の一品である、私しの近席から能神々々と、さゝやく聲が聞いた

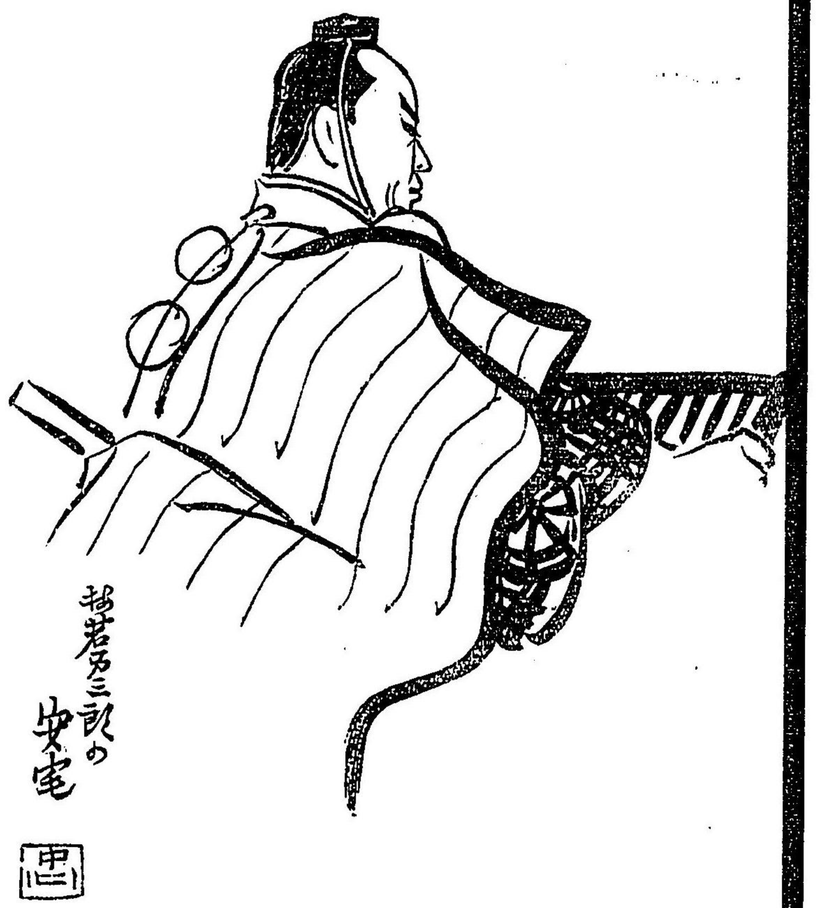
（英　忠）

萬三郎樂屋に入る

（四十四年九月二十四日）

木曾がすんで樂屋に入ると、山口直知がすぐ頭巾をぬがせた、其まゝ座に着すと、囃子方の挨拶を受けて裝束をぬいだ、青木や、久樹や、山口や、六郎、鐵之丞迄が皆扇をしろげて、あほいで居る。今迄舞臺では非常にこはい顔に見えた萬三郎は、樂屋に入ると、まるでかはつたニコやかな萬三郎になつて居た。

（英　忠）



萬三郎の安宅

堂々たる威容、朗々たる音吐實に當代の絶品と稱せらるゝものは梅若萬三郎の安宅である、若し夫れ天も響けと謳み上げたる勸進帳の名調子に至つては關の人々ならぬ滿場の觀客肝を消し恐れをなして稱へぬはなし、今後回を重ぬるに隨つて愈々圓熟せば夫れこそ古今に冠たる安宅となるは請合申す

（笑月）

安宅の強力（其二）

あれに見ゆるが關ぢや。さても〳〵おびたゞしい體かな。屋倉かいだてを上げ。中々用心きびしい體ぢや。やあ又あの木のそらに。何やら眞黑なものが四つ五つ掛けてあるは。何ぢや。山伏のこゝぢやとさても〳〵痛はしい事かな。餘り痛はしい事ぢや程に。一首つらねて「歸らう。山伏は見ふいてこそ逃げにけれ誰おひかけてあびらうんけん。〳〵」

萬三郎の安宅　（其三）

シテ　やあ何とてあの強力は通らぬぞ

ワキ　あれはこなたより留めて候

シテ　それは何とて御留め候ぞ

ワキ　あの強力がちと人に似たると申者の候程に。さて留めて候よ。

シテ　何と人が人に似たるとは珍しからぬ仇にて候。さて誰に似て候よ。

ワキ　判官殿に似たると申す者の候程に。落居の間とゞめて候ぞ

シテ。　や。（言語道斷）　判官殿に似申したる強力めは一期の思出な。腹立や日高くは。　能登の國まで指さうずると思ひつるに。　わづかの笈負うて跡に下ればこそ人も怪しむれ。　總じて此程。　につくし〳〵と思ひつるに。　いで物見せてくれんとて。　金剛杖を追とつく散々に打擲す……

寶生新の安宅ワキ

威ありて猛からぬ一箇の美丈夫、巾あり力ある名調子にて「斯樣に候者は加賀の國富樫の何某にて候」と名乘り上げたる立派さ、大抵の武藏坊は後へに瞠若たる勢ほひ、此ワキをして梅若萬三郎の辨慶に配す眞に是れ能界の双璧

（笑　月）

夕顔山の端の出

（四十四年六月十八日）

萬三郎の此能は、當日お好により小書附となつた、其旨掲示されたのを自分は不快に感じた、此寫生は前シテで作物の引回しを落して「巫山の雲」と謠つてる邊であらう、後シテは序の舞の場所も違つて、切近くなつてからの型、何れも麗はしかつた。此能を見て、以前始めて半蔀を見た時嬉しかつた事を思泛べずに居られなかつた

（雪　鳥）

萬三郎の定家

（四十三年五月二十六日）

其日は雷雨が劇しかつた、唯さへ聞取りにくい此人の斯ういふ曲だから、更にシテの謠も地謠も聞えなかつた。晴天でも能舞臺は餘り明るい建築ではないのが、あの天氣だから薄暗い處に、此世の人とも思へない女性一人、動くが如く動かざる如くモゾ〳〵としてるのは、何か一種の謎の樣な氣がした

（雪　鳥）

同　後シテ

そとはつれなき定家かづら、是見給へや御僧と引回しを落した所の寫生らしい後シテでの見所は切の、歸るは葛の葉のもとの如くはひまとはるゝやト造物の柱に躰を卷き付くるやうに縋れかゝるところであらう、

（雪　鳥）

伴馬の朝長　英志

伴馬の朝長

（四十三年二月二十日）

九段で梅若實の追善能があつた時、伴馬の朝長を始めて見た。下掛ではツレや太刀持を連れず、前シテは一人で出る。元來此前シテは上品な美人であれば宜いわけなのに、凡ての調子は餘程老女染て居る。何流で演つても老女か或は幽靈の感が起る。自分は之を不得心な事と思ふ。伴馬のも其慨みはあつたが、中入前のかくて夕陽かげうつるの遊は實に青塚苔冷やかに白楊風に戦ぐといふ樣な蕭條の趣があつた。由來中入前の妙味は此人得意の境である。

（雪　鳥）

同　後シテ

前シテが陰森の氣に滿ちて居るのに、後シテが又滅入り込む樣に感せられる。清經や通盛などの樣な腑甲斐ない武將では無いが、一帶の調子が沈んで消え入る樣に感ずる。如何に考へても壯といふ趣に乏しいのが。修羅物の內で最もジメジメした感を起させる原因であらう。

（雪　鳥）

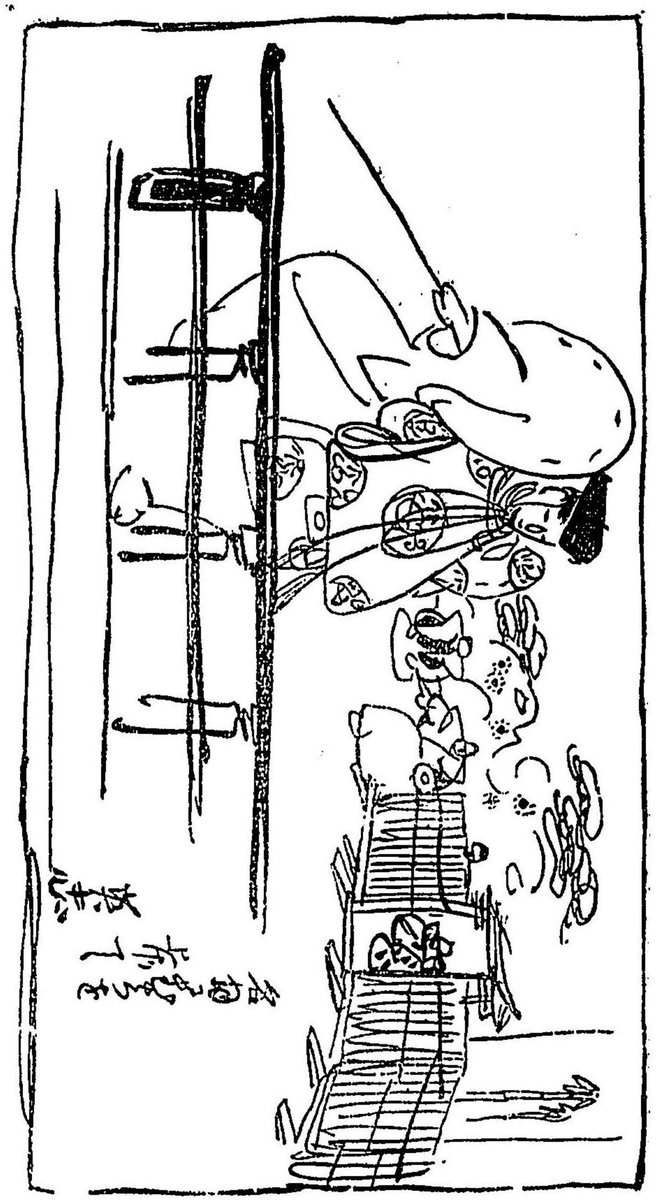
松本金太郎の俊寛

（三十六年十二月寫生）

私しは寳生流の能をあまり見た事がない、寫生も二三十種の外はもたぬが、其中に老松本の俊寛があつた、思出すと古い事で、芝の能樂堂が九段になつた當時のものである、シテは黄土色の花帽子に同色の水衣であつた、金春の黒髭や、觀世流で見る沙門帽子よりは、俊寛としての上から此流儀の形ちはまさつて居ると思つた、

九郎翁の能を見ると、秋の景色を見た時の樣な心もちがする、老松本の俊寛は、冬の大きな枯野の景色を見た時の樣に思出されるのである

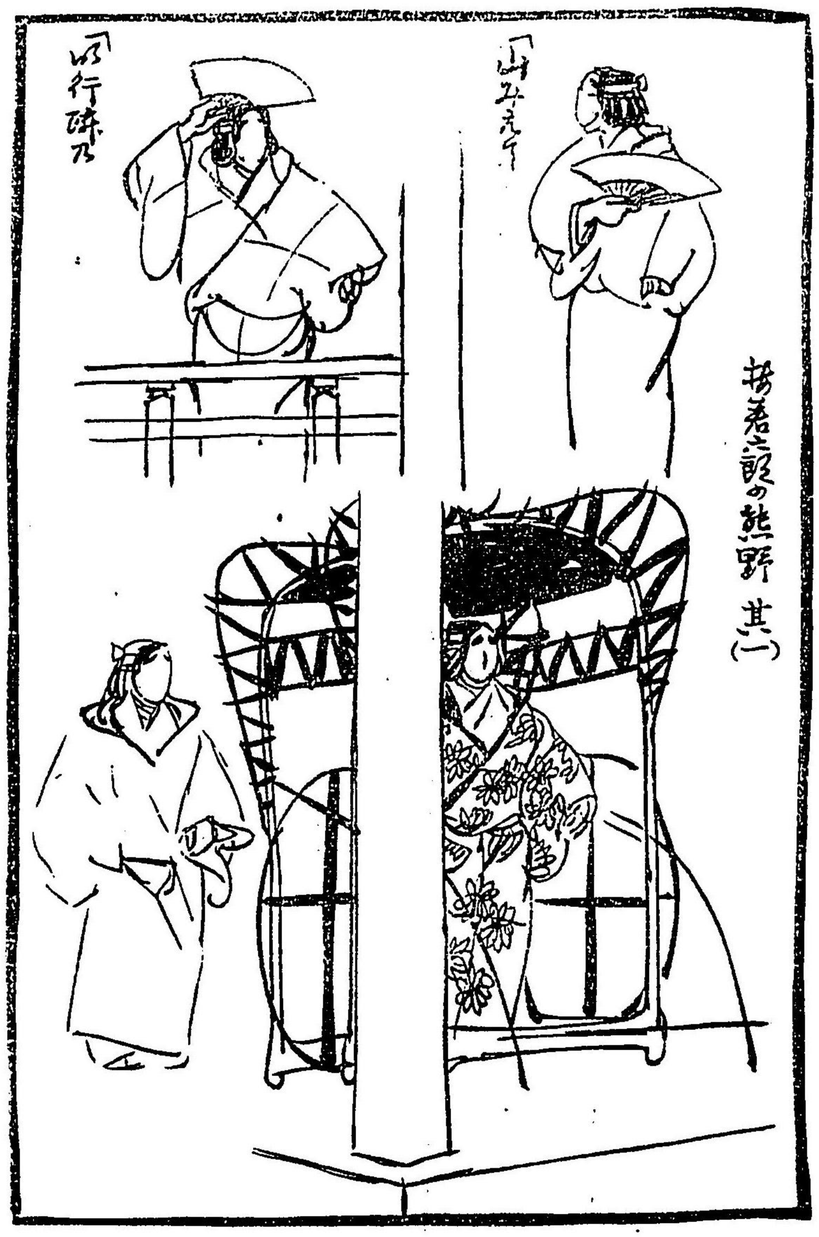
（英　忠）



小督

高倉の院の勅を奉じて仲國嵯峨野に小督を訪ぬ、心も澄める秋の空、名月に鞭を揚げて駒を早むる仲國の姿は宛然一幅の名畫に似たり、此ところ能にては駒の段、謠も型も興趣溢るゝ一節なり

（笑月）



六郎の熊野

母の病を餘所にして花見の興を幇くる熊野が歎き、よし宗盛は察せざるも滿場の觀客皆袂を濕ほす、落花の和歌は終に涙なき主公の心を動かして東に歸る嬉しさよ此前後の情致遺憾なく現はるゝは梅若六郎が優嫁の技に俟つべし

（笑　月）

梅若六郎の熊野　（其二）

葛物の内でも熊野は、はなやかな能である、小面唐織着流しのシテや、シレが出る、風折烏帽子長絹あるひは狩衣のワキや素袍の太刀持ちも出る、其上シテ桂の處へ大きな車の作物が出る、それで季節が春の物であるから、花といふ文言がむやみにある當代の葛物師たる梅若六郎氏には松風に次ひでのはまりやくである

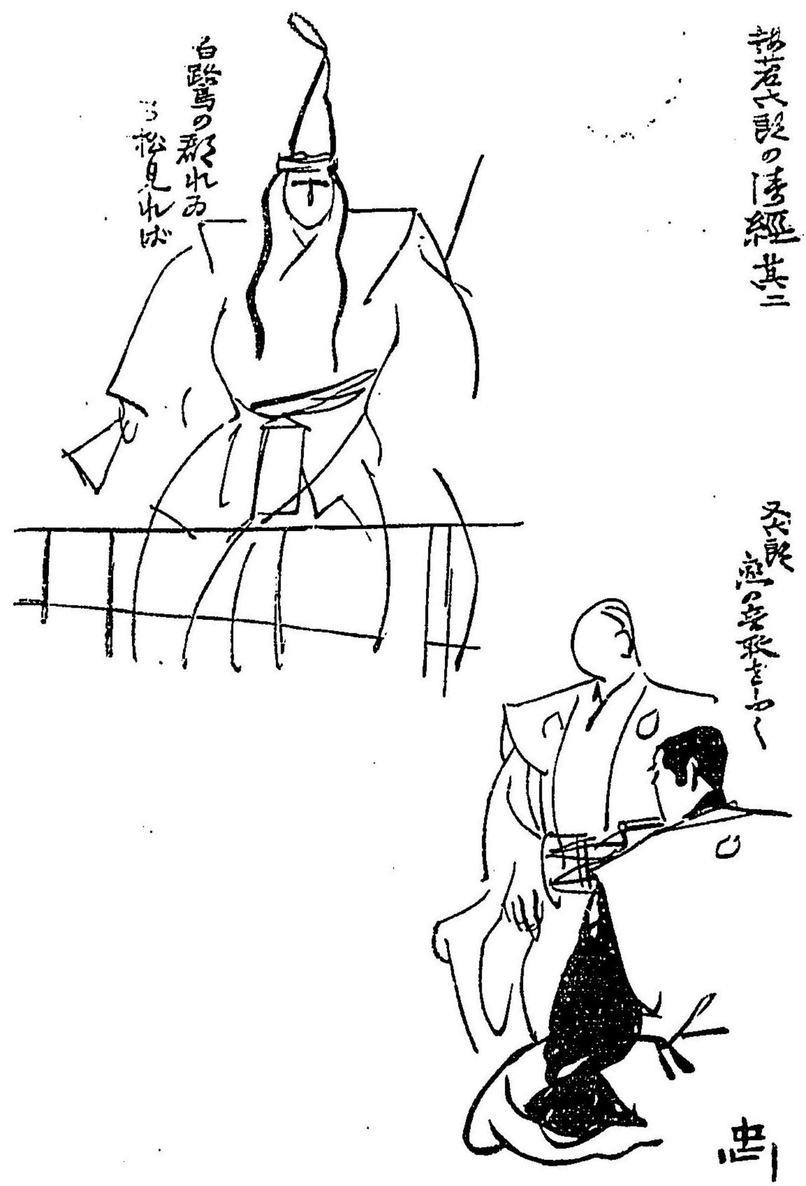
（英　忠）

六郎の清經

（四十四年三月十二日）

實の追善能に戀の音取があつた、笛は一噌又六郎で藤田多賀藏が後見をした、笛座から前へ出て橋掛りの方を向いて所謂音取の唱歌を吹く、シテは此音につれて佇みつ〳〵出て來る。中々趣の深いものである

（雪　鳥）



拙若太郎の諸經其三

同前

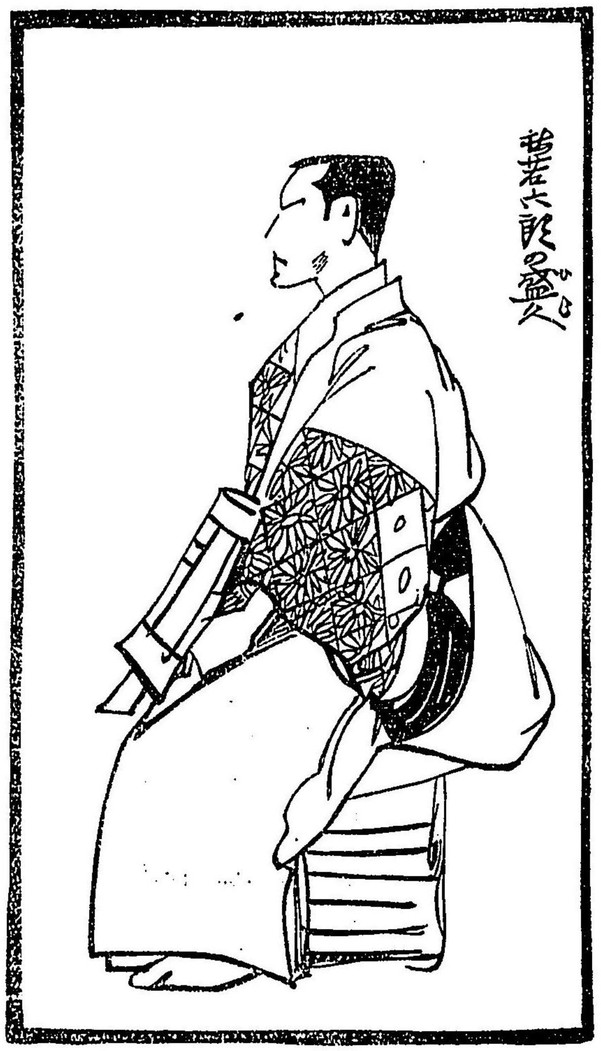
多勢かと肝を消すと橋掛二の松の邊へ行き、舞臺へ歸つて船の舳板に立上りと乘込みたる時は、宛ら月夜舷頭に立つて脚下に碎くる銀波金波を眺むる氣持がした、舟よりかつぱとなどは此人の獨特の味を見せる所であつた

（雪　鳥）

千手

平氏一代哀史に富む、重衡の最期も其一なり、千手が一宵の心盡し空しく生別の涙を濺ぐ之を當代の兩花形六郎織雄（今の鐵之丞）の兩人に配す、觀者恍惚として其優艶の技に醉はざるなし

（笑月）



六郎の盛久

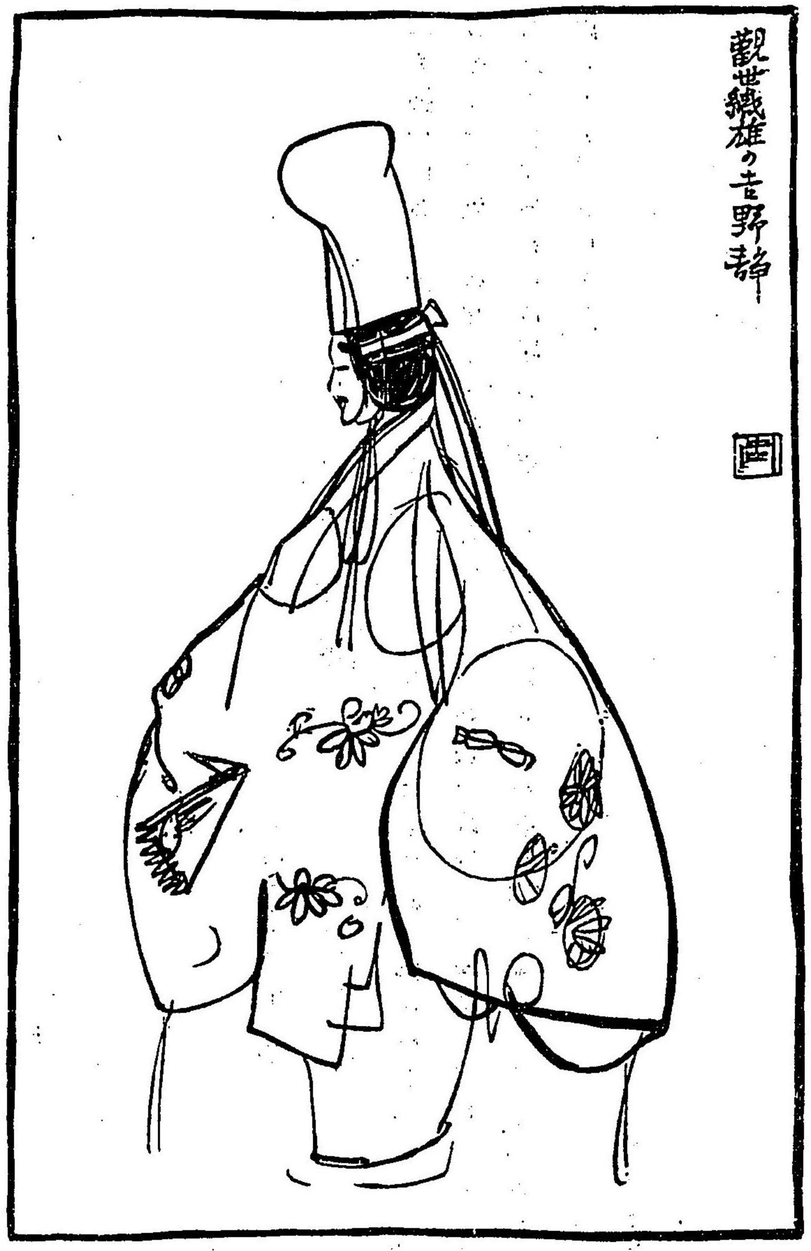
盛久と云ふ能は直面の現在物で皮肉に出來て居る諸も型も、而して經文の効力により一命を免るゝ趣向は根つから難有くないが局所々々の妙味はあるので演者の技巧によつては隨分人を引付ける力のある能だ、六郎其人の技巧は勿論此資格を備へて居る

（笑　月）

伴馬の盛久

金春の櫻間伴馬翁は當代の名手、適くとして可ならざるなし而も其禿頭と痩軀とは如何にしても盛久らしからず、喬伯英忠のスケッチ能其眞を寫して居る、夫にも拘らず彼れ一度舞臺に立つて「いつか文清水寺の花盛り」を謠ふに至つては觀者只其盛久の境遇に同化するの外彼翁の禿頭と老軀とを想ふものはない、技藝の力は恐るべしいふものである。

（笑月）



鐵之丞の吉野靜

（四十四年四月十六日）

二人靜の前篇、或は其現在物とでもいふ可き吉野靜は餘り出ないものである、舞を見せて追手の足を止むるなどいふ考は面白い趣向で、京女の綺麗なのに見惚れて居た衆徒の間抜さが察せられる。遠い物の割に筋も通つてるし場面の變化もある、宜い能だ。

（雪　鳥）

吉野靜の間（あひ）

（同前）

場所が吉野だけに國栖と吉野靜とは其間（あひ）が似てる、貝を吹くのは安宅の貝立なといふのが、他には餘りないかと思ふ、此脇は忠信で智謀に富んだ所を見す可き所あるが、脇方を輕んずる風が今尙ほ一部には殘つて居て、大事な役を未熟な者に演らせられるには弱る。脇が盆槍では此能の價値は三分の一以上減殺されると思ふ

（雪鳥）

大原御幸

槿花一朝の夢、平氏沒落の果は罪なき女性をして此姿、建札門院御年廿有九、髪を断つて大原の草の庵に世を捨人の尼御前、昔を捨てぬ法皇の御幸に柴の扉のしばしが程は浮世の情を語るも涙、聞くも涙

（笑月）

大原御幸の(二)　後

墨一度印刷の繪は能樂大原御幸の舞臺面を萬分の一もあらはす事は出來ぬと思ふから其れで少しく着附の色の説明をして見やう

先づ藥屋の引廻しをとる。女院のシテは增の面に白の花帽子深く白地銀スリ箔の着流　ツレの大納言と阿波內侍は面深井女院同樣にて着附の色コン無地なり後シテは白着流の上にむらの水衣を着る銀のすり箔はむらの水衣にうつりて古色深し

法皇ツレは直面白花帽子白棘指貫は白郡地へ白の八膝をちらし種々の金らんより成る袈裟をかける之れが又女院の水衣と配合よく目前に古土佐の名畫卷をしもとくの感が有る

（英　忠）

大原御幸の一節（三）

法皇

池水に汀の櫻ちりしきて波の花こそ盛なりけれ

女院

昨日も過ぎ今日も空しく暮れなんとす。明日をも知らぬ此身ながら。唯先帝の御面影。忘るゝ隙はよもあらじ。極重惡人無他方便。唯稱彌陀得生極樂。主上を始め奉り。二位殿一門の人々成等正覺。なむあみだぶ。……」

（英　忠）

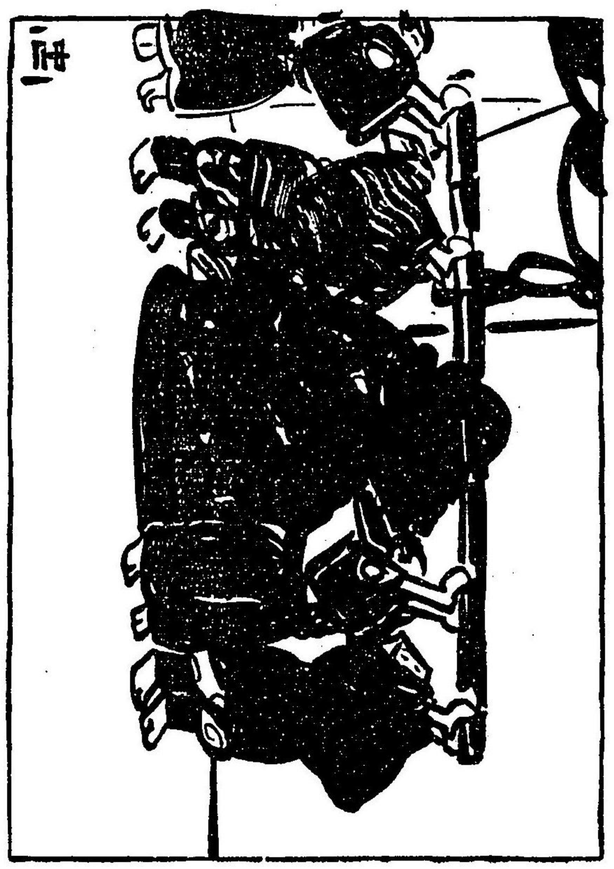
道成寺集（其一）

囃子方座に着き地出で並ぶと狂言と同後見とも四人作物の鐘を持ち出づる。

狂言

オモ「エイトーウ〳〵

アド「エイヤー〳〵



道成寺集（其二）

舞臺眞ン中の棟木に釣り上げて綱を笛柱の鐶に通して結び。猶シテの後見四人にて引かへ居る

狂言

。サラバ鍾オアギョー。一ダントヨカロー

。エイトー〳〵。エイヤーア〳〵

。エイ。エイオー

道成寺集（其三）

鍾の作物は郡青色のリンゾにてつゝみたる物模様はぼたんから草の間に寶をちらした浮おりである

道成寺集（其四）

シテの道行

月は程なく入りしほの。〳〵。煙満ちくる小松原。急ぐ心かまだ暮れぬ。日高の寺に着きにけり

と大小前に二三足ゆきて足を留め。

「急ぎ候程に。日高の寺に着きて候。やがて供養を拜まうずるにて候」

道成寺集（其五）

一（扇を左に逆に持）「道成興行の寺なればとて。道成寺とは名づけたりや」

二（拍子ふみて急之舞となり）脇座の前より鐘を見上ぐる

三「春の夕暮きてみれば――」（と上刪する）

四「さるほどに〳〵　寺々の鐘」（と欷ひ）「月おち烏ないて霜雪天に。滿汐ほどなく日高の寺の。江村の漁火愁に對して人々眠れば。……」

道成寺集（其六）

「きよ隙ぞと。立ち舞ふやうにてねらひよりて。つかんとせしが。」と。（鐘を見上げ扉を振り上げ。烏帽子の紐解き捨て肩にて正面に刎ねおとし鐘の下にゆく兩手さし上げ鐘にかけて正面をむき）

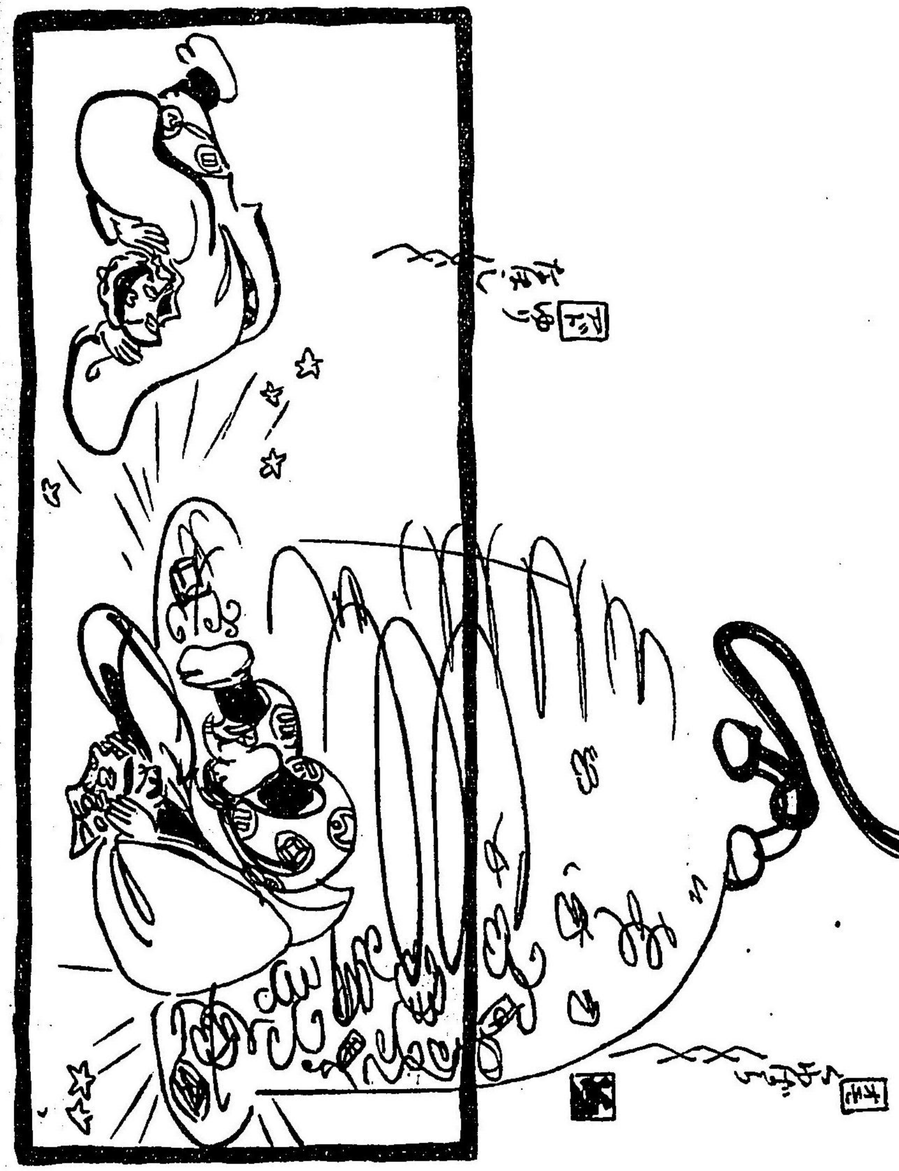
「おもへば此鐘うらめしやとて。龍頭に手をかけ飛ぶとぞ見えしが。引きかづきてぞ失せにける」（此時鐘おつる此呼吸こそ六郎のシテに爲三郎か綱引をせしが實に髮毛一筋の間をも區かざりき）

道成寺集（其七）

間の狂言　鐘落つる狂言物音にびつくりして

オモ「桑原々々アド鑄り直し〳〵。今のは何事であつたぞしたたかな鳴りやうであつた。膽がつぶれて性根がつかぬ。扨々わごりよのなりは。いやお主は何として何たぞ。扨も〳〵膽をつぶいて。氣を取り失うとしたが。わごりよが何としたぞと思ふて尋れて來たは。扨わごりよも左樣であつたか。身共は今に氣が付かぬ舞が面白うてとろ〳〵と居睡りした折ふし。おびたゞしく鳴た處で膽をつぶいた。尤もぢや。さて今の鳴りやうは何であらうと思ふぞ。其の事ぢや。神鳴であらうか。神鳴ならば前かどに少しなりとも音がせうことぢやが。不審な。わごりよが言ふごとくぢや。地がおびたゞしうゆるいだ程に。身共は地震であらうと思ふ。いや〳〵それでもあるまい。先づこちらへわたらしめ。南無三寶鐘が落ちてあつたは。誠にこれであつた。づいぶん念を入れて釣つたが。龍頭が切れた。何として落ちたぞな。見れば龍頭も其のまゝ有り。損事はあるまいが。誠に事の外にへた。落ちた分でにようつやの〳〵したたかにに入たは。は置かれぬ程にこのよしを申さしめ。さてこれは如何としてよからうぞ。このぶんでやすいが身共が申したらば悪からう。尤もぢや。わごりよ云ふてくれさしめ。言ふはめ。されば身共が受取つたによつて言ひにくい程に。わごりよがいて言はしこそ身共が受取つた程にわごりよがいて言うてくれい。いや〳〵身共は言ふ事はなるまい。早ういて言はしめ。さりとては頼む程にわごりよ言うてくれい。これは如何なこと身共が言はう仔細が無い。わごりよ行かしめ身は知らぬぞ。

なう助かりや〳〵



道成寺集（其八）

（ワキの祈り）

ワキ「水かへつて日高河原の。眞砂の數は盡くるとも。行者の法力つくべきかと。

ツレ「皆一同に聲を上げ。ワキ「東方に降三世明王。ツレ「南方に軍荼利夜叉明王。

ワキ「西方に大威德明王。ツレ「北方に金剛夜叉明王。ワキ「中央に大日大聖不動。

地動くか動かぬか索の、なまくさんまんだばさらだ。せんだまかろしやな。そ

はたやうんたらたかんまん。聽我說者得大智慧。知我身者即身成佛と今の蛇身

を祈る上は。ワキ「何の恨みか有明の。撞鐘こそ……。

道成寺集（其九）

「程なく鐘樓に引き上げたり」と。鐘あがる後シテ般若の面に金うろこのスリ箔唐織をぬぎ　打杖をもつ

形にて見るべき處は「鐘に向つてつく息は猛火となつて其身を焼く。日高の河波深淵に飛んで入りにける」（と幕の中に飛び入るところ息をつく間もなし）

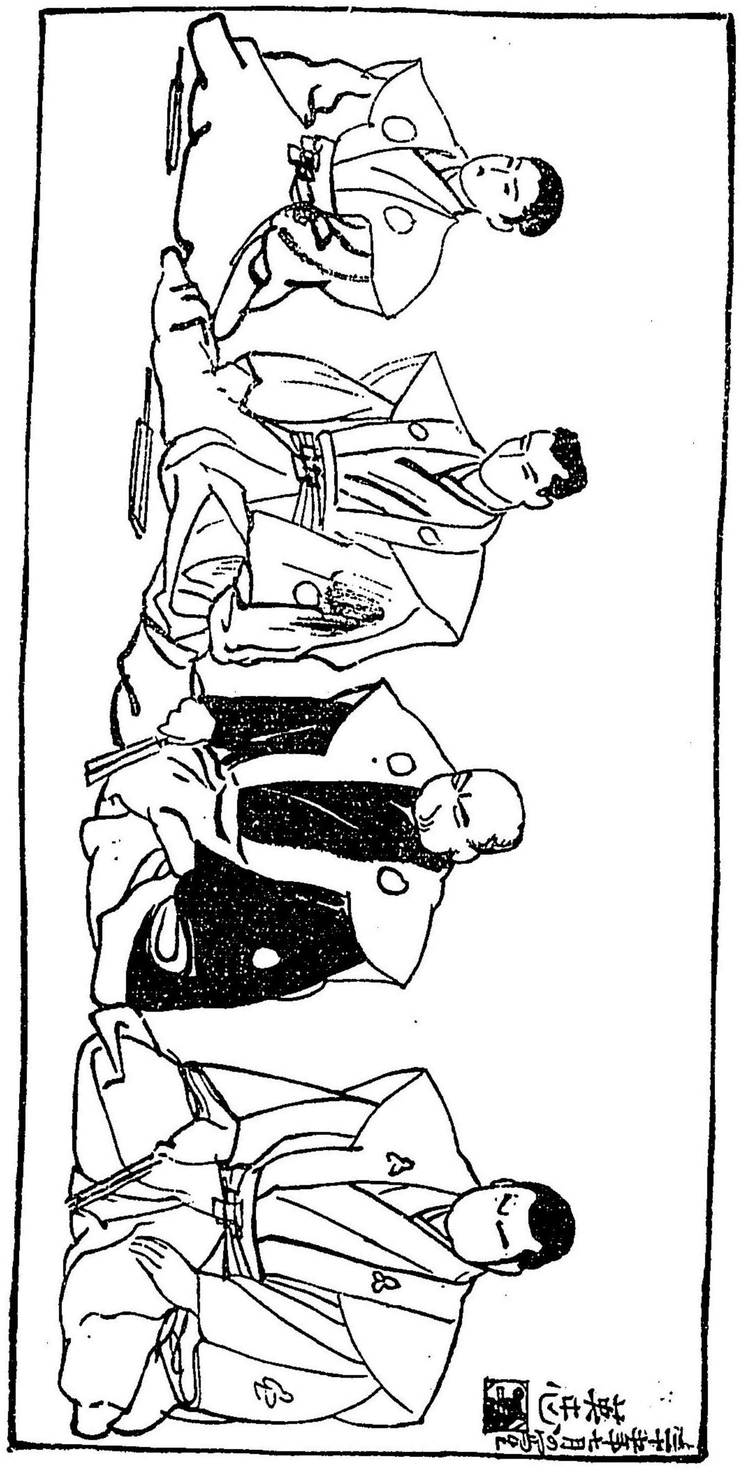
道成寺集（其十）

此道成寺について、金剛右京が今年の春樂堂でつとめた時シテが御幕に飛んで入つたので私しは右京が當日着けた面を手に取つて見やうと、樂屋に行くと、右京は未だ打杖をさか手につきて飛居つたまゝの形で居た何かのはづみで打杖が折れて居たが、其形は如何にも物すごかつた、舞臺で留めると立ち上つた、伴馬が來てあいさつをする門人が茶をもつて來る東條のワキが來ると。右京は貴君が。一足つめてくたすつたので。ありがたう。なぞと言ふて居た面が其所へおかれると。早くも伴馬が手に取つてほめた、私しも手に取つた、右京は金摺箔に葛らのまゝで出て來て、此面は大師の御作ですと言ふた

四五日過ぎて右京氏を訪問して、蛇の面を寫生した、實に美事な物で面の上部は白色で下部が朱土色で眼と角と齒は金である

私しは十何年能を見た間に蛇の面も度々見たが此如き名作は　初めてゝあつた

（英　忠）



梅若父子の素謠　隅田川

此の寫生の父は大そうよく出來て有ります、父は前へ屈み目の癖が有る人で、顔なども座談の時は眼に愛嬌が有りましたが、舞臺上では眼が大へん大きく見えました。私なども九年前は、こんなに若かつたのですかな。貴方は私の顔を盡くのに額と眉毛と頬のシワで似させる樣ですね。私は舞臺に上ると、一生懸命なので自身の盡かゝれて居るを少しも知りません、斯う云ふ圖は寫眞にも殘て居りませんから拜見しますと父の生前が思ひいだされます。

九月十五日　　梅若萬三郎談

梅若實の卒塔婆

父が卒塔婆を勧めましたのは、私が覺へましてから三度かと思ひます、二十五年頃にも一度勧めました、貴方の寫生は三度目のだらうと思ひます、老女物の中でも、卒塔婆だけは、度々父のを見て居りましたから、何うにか私にも勧められる樣に思はれます、先頃鐵之丞が改名の時私に檜垣を勧めろとの事でしたから度々御辭退をいたしましたが、岩倉樣其外の方々から、是非との仰せでして、それではと父の形付を調べて見ましたが、何うも分からん處が大分ございます、其のうち紅雪が亡くなりまして、檜垣も其の儘になりましたが、來年は追善が有りますから、是非其の時には勧めなければなりますまいと思つて居ります。

四十四年九月十五日

萬三郎談

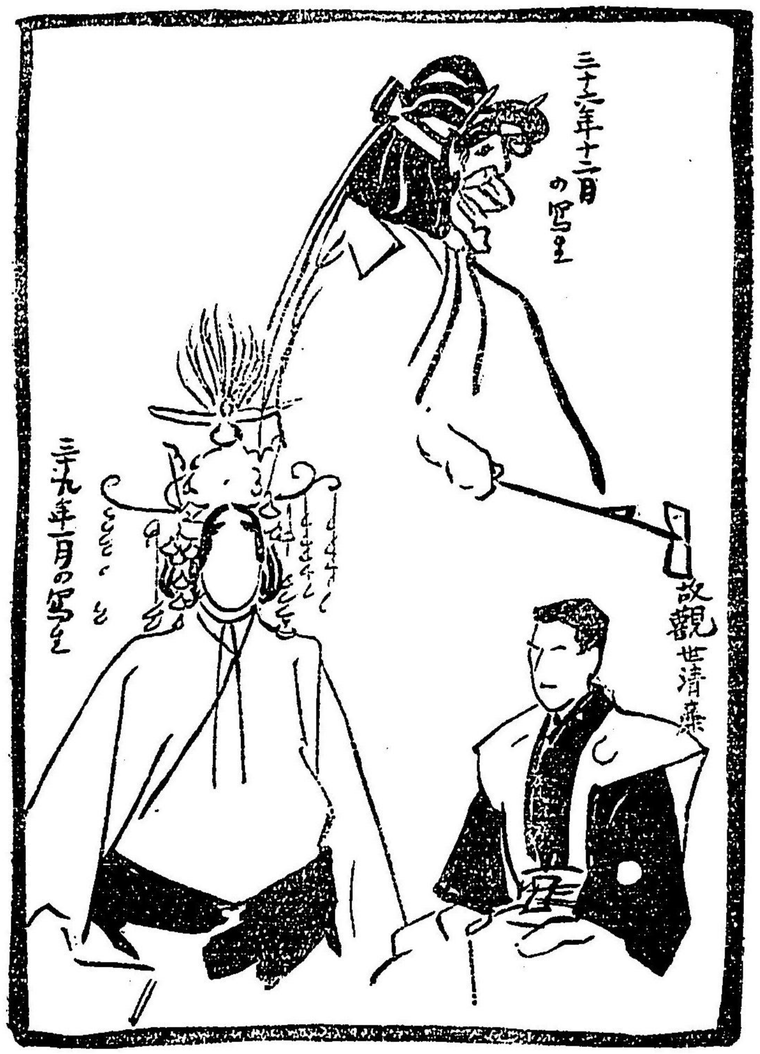
故實の卒塔婆小町

故觀世清之の談に曰く「藏前の實老人が二度目に卒塔婆小町を演じました時次弟からサシ、下歌、道行と謠つて行きますのに何處迄も確かりした聲で居ながら節と假名の扱ひとで少しも花やかにならず全く老女の憔悴した樣子が現はれて居ました」

（笑月）

故觀世清之翁

故清之翁は堅實の技藝を以て知られ先代六郎としては實老人に隨つて能樂の再興に努め、觀世流の元老であつた、晩年病を鎌倉の別墅に養ふ、予は屢令息喜之氏と共に訪ふた、病中の翁は頰落ち肉痩せて人と語るにも懶き樣子であつたが何時も快く予を迎へて諄々として技藝談を試みた、其溫顏は今も眼前に在りて懷かしき佛の髣髴として晴るが如き心地する、翁の如きは眞に技藝に忠實なる斯道の先覺者であつた、喜之氏亦能く翁の衣鉢を襲いで堅實の藝風であるのは頼母しい。

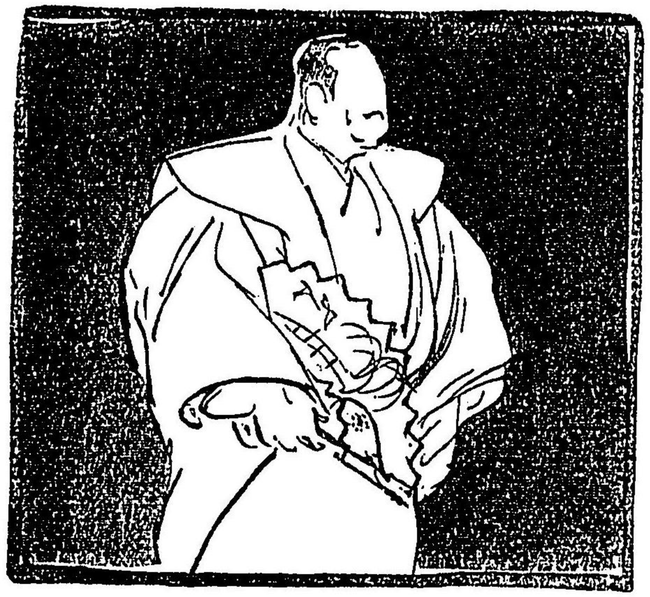


觀世紅雪翁

（四十四年三月十二日寫）

紅雪（前代鐵之丞）の能は通ひ小町が終りでございました。其の時は、確か父の代はりに勤めましたので。私はッレでしたからよくわかりませんでしたが、六郎が後見で、舞の最中急に身體が利かなくなりまして、六郎に扶けられて御幕に入りました。其の後父の追善には無理に鷲の仕舞を勤めまして、其の時は六郎が抱いて立たせた樣な譯です。遂に本年三月十二日やはり父の追善能に江口の切りを謠ひまして之れが舞臺の御別れとなりまして、歸らぬ人となりました。

萬三郎談



觀世清廉の技藝

矢石五郎に學び梅若實に學び更に脱化して別種の妙趣を示しましたる故觀世清廉は能壇の一才子たりき、婉轉なる美聲、颯爽たる風姿能く觀衆を魅するの力あり、後年脚疾を患ひて足の運びに難ありしも其技漸く渾熟し絢爛より一轉して淡雅の域に進みしが惜むべし腦患の爲め舞臺を退き壯齢を以て病に籠り後遂に逝けり、彼が得意の三番目物、狂女物は孰れも當代の秀逸、宛として今尚眼前に髣髴す。

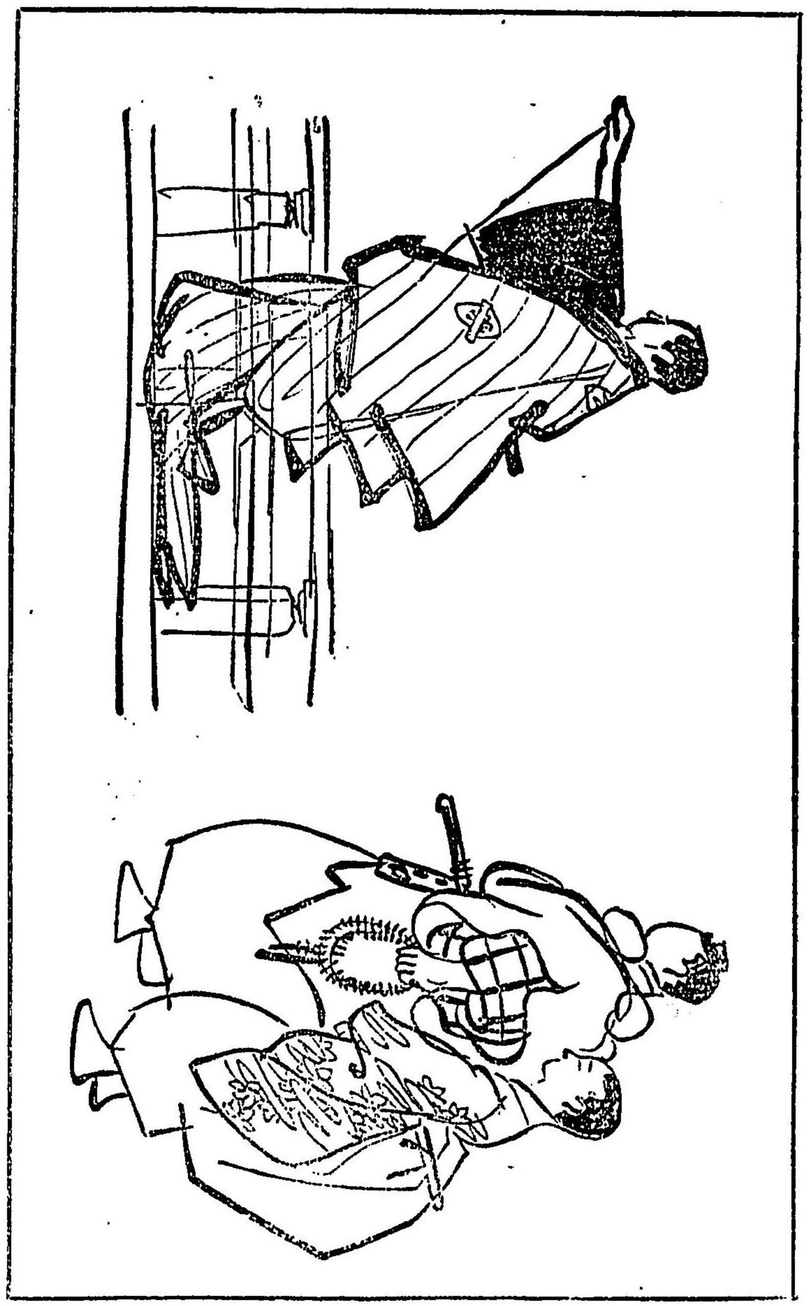
（笑月）

寶生新の壇風の脇

（四十三年四月十六日）

壇風といふ能は脇方で最重しとするもので、下掛寶生の霞寶會第一回演能に同流家元たる新が初役を勤めた。成程むつかしい能だとは思はれたが、然し其割には面白味は少ない、此樣な脇を若し拙い者が勤めたらさぞッマラぬだらうが、有繋に新は見物に息を凝させるだけの熱心を見せた、――死骸を抱く所の寫生がないのは殘念だ、彼所が脇の生命ではあるまいか。

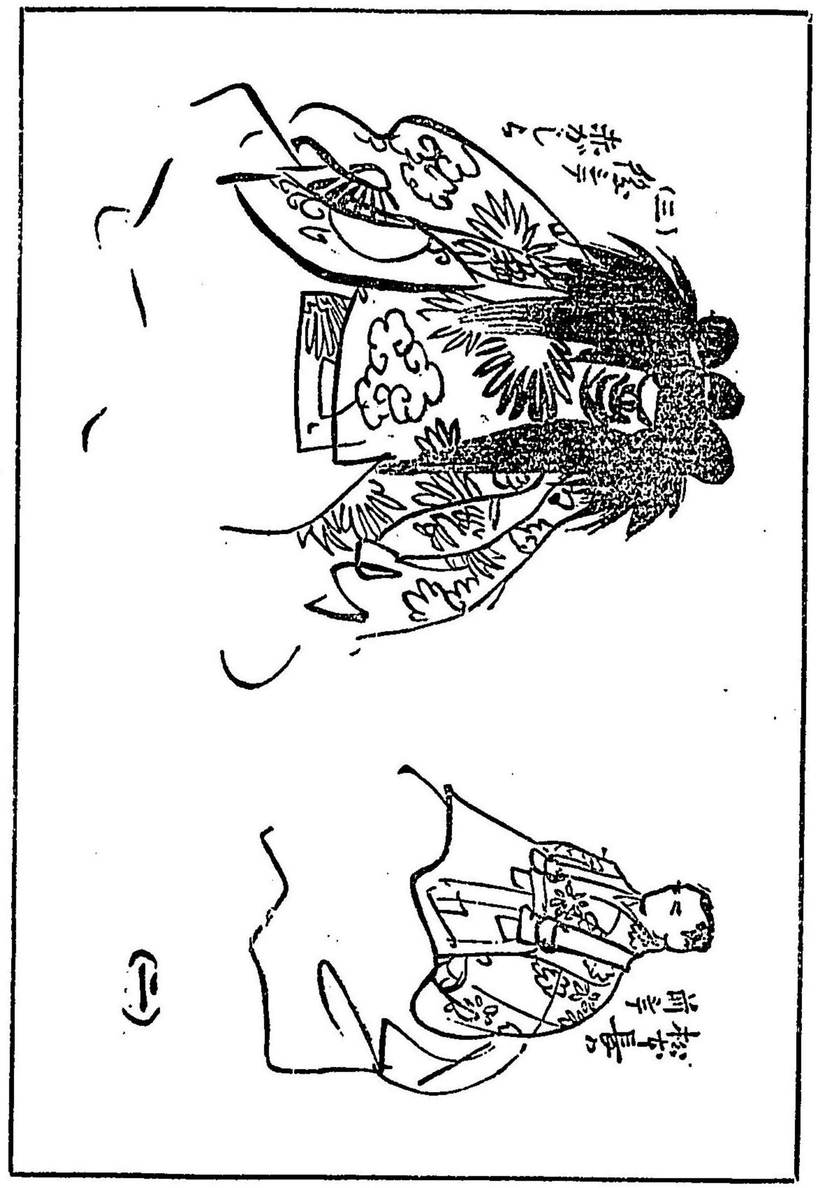
（雪　鳥）



壇風の新と貢五郎　（同　前）

脇と船頭との問答は非常に激しい趣がある、貢五郎の船頭も無難であつた、然し二人共にも少し迫つた感じを表して貰ひたかつた。

（雪　鳥）



長の壇風　（同　前）

壇風のシテは脇に較べて輕いに相違ないけれども、矢張一役としての味はある。資朝卿は盛久や重衡などの趣ある上に、更に王朝の忠臣といふ特色がある。疲れたも女々しくはない。一寸心持に六かしい所がある。後シテは強て役を作つた樣に思へるが、然し長は前後とも謹んで勤め了せた。

（雪　鳥）

梅若萬三郎の遊行柳

（四十四年三月五日寫）

初めて此能を見たのは梅若の舞臺で實翁のつとめのであつた、二度目は萬氏の此寫生である、初めの時は正面から見た、二度目の時はワキ正面から見た、寫生はワキ正面の方が形ちがうまくゆく樣に思はれたすべて遊行とや定家とか言ふ作物によつて形のあらはれる物は、ワキ正面にかぎるやうである、此日の裝束は玉虫色の狩衣に、皺尉の面で大口は白綠色であつたから青い柳の作物と、草色づくめの此着附との中に白垂と共尉面の白いのが、非常に目立つて、見えた、それでシテ其人の、あの大きな身體が、老枯ちた棉の精になつて居た。

（忠）

萬三郎の融（とほる）（酌の舞）

（四十四年九月八日）

私しは融を見る度に、今迄後シテにはさらに重きをおかないで居た、其れは前シテの田子をかたげ「月もはや、出汐になりて鹽釜の」なぞと言ふやうな處は如何にもおもむきが有るが、後シテは中將面に初冠で舞ふのみであるから、變化のないつまらぬ物であつた。

其れが萬三郎の酌の舞に至つては形の變化も多く、小書も此樣なものなれば何度見てもいゝと思ふ、以來觀世流の融には此酌の舞を必附ける事にきめてはどうだらう。

（忠）

金太郎の融

（四十四年二月十九日）

櫻間金太郎の融は寃であつた、親譲りの鮮かさに性來の鷹揚さをあしらつて、極めて上品な出來であつた、忘れたり秋の夜の邊など特によかつたと思ふ、此繪は少し松本長の俤がある樣でもあるが旨く出來てると思ふ、此日は右京の道成寺の古式といふのがあつた日だつたと覺え一居る。

（雪　鳥）

梅若六郎の砧　（其一）

能の中で月の出るものも。づいぶん多いが。其の中にも。松風の月はさへて居るし。砧の月は如何にも曇つて居る樣に思はれる。此能で一番氣に入るのは。シテの唐織の色や。砧の作物である梅若で後シテが着る坪折の白地銀文も大いに美事だが前シテの唐織は古味も有朱と白と金の山茶花が地色のクスンダ草色に和して何ともいへぬ色である。

故人大和田建樹師は。此砧の「故郷のからぼろ〳〵はら〳〵迄を大得意で度々謠はれたし。又度々きかせていたゞいた事が有つた砧の書を書く度びに師のぼら〳〵はら〳〵が思出されてならぬ梅若萬三郎氏に此寫生を見せた時同氏は後シテのしをる形六郎氏の樣でない私しの形の樣だといはれた。同氏の此一言は大いに私しの心をつよくしたものである。

（忠）

梅若六郎の砧　（其二）

前ジテ　蘆屋何がしの妻
深井　葛　葛帶　箔　唐織　扇、

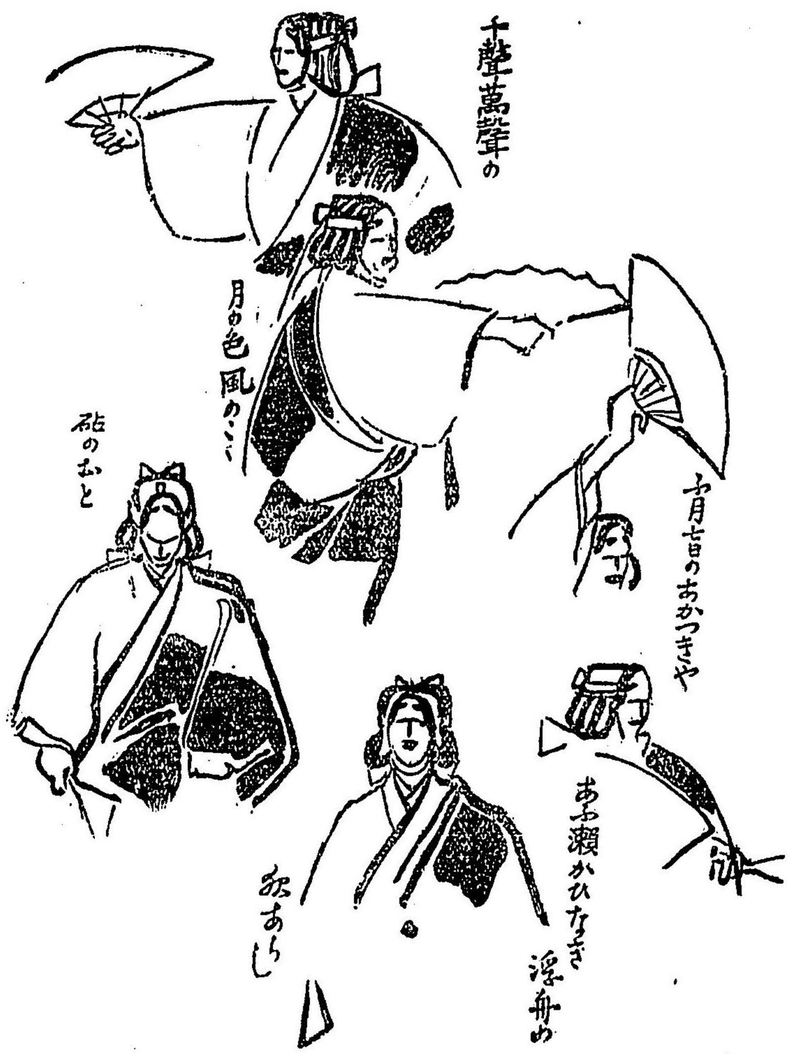
ツレ　夕霧
孫次郎　葛　葛帶　箔　唐織　扇、

後ジテ　亡靈
泥眼　葛　葛帶　羽根元結　箔　淺黄大口、

ワキ　蘆屋の何がし
段髭斗目　素袍上下　小サ刀
後は素袍の上をとりてクロウを掛け小サ刀をも取る

トモ　侍者
賢斗目　素袍上下　大刀持ち

アヒ　下僕
長上下　扇



梅若六郎の砧　（其三）

九州蘆屋の里に何がしと云ふ人あり。訴訟の事ありて都に登りゐけるが。あまり長逗留になるとて夕霧と云ふ侍女を故郷に下し。此年の暮には必ず歸らんと云ひ送りしに。折しも砧の音に聞えしかば。わらはも之を打ちて心の慰めたしといひ。仕へる夕霧と共に打ち遊びては夫おもふ心を寄せゐたりしに。都より又便りありて此年の暮にも下りがたしと言ひ來りぬ。あまりの事に失望してそれより病の床に打ち伏し。遂に空しくなりたるを。夫歸國していたく悲みみづから佛事回向して弔らひしかば。亡靈いでゝ恨を述べしが。遂に法華讀誦の功にて成佛する事を作りし者也季節は秋にして地は筑前也

梅若六郎の砧　（其四）

三瀬川沈み果てにしうたかたの。あはれはかなき身のゆくへかな。跡のしるべのともし火は。打てや〳〵と報の砧。恨めしかりける因果の妄執。因果の妄執の思ひの涙。砧にかゝれば。涙は却つて火焔となつて。胸に煙の焔に咽べは。叫べど聲が出でばこそ。砧も音なく。松風も聞えず。呵責の聲のみ恐ろしや。半のあゆみ隙の駒。うつり行くなる六つの道。因果の小車の。火宅の門を出でざれば。めぐりめぐれども。あぢきなの浮世や。心は葛の葉の。歸りかねて執心の面影の。耻かしや思夫の。末の松山千代までと。かけし頼はあだ波の。あらよしなや空言や。そもかゝる人の心か。

懺悔を哀傷に、砧と月と聲に風あり、終に佛法の力を以て、悉く轉じて成佛の一路と歸せしむ。

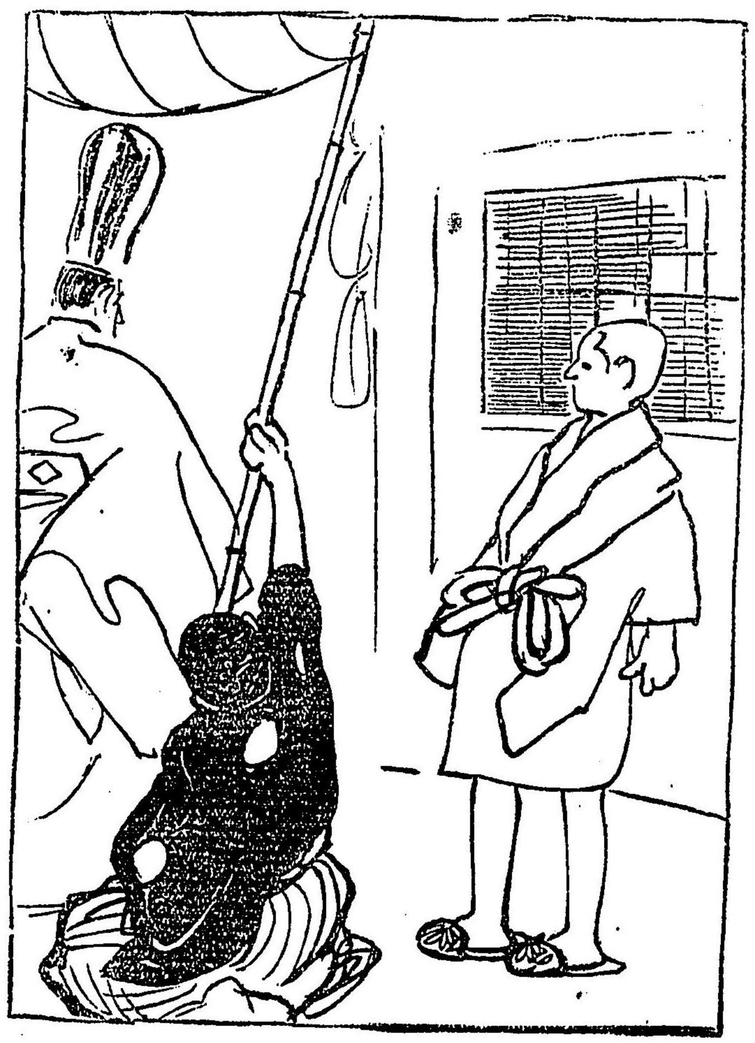
六郎の角田川鏡の間

（四十四年九月二十四日）

觀世流謠曲新報社の一週年記念能の時であつた六郎十八番中の最も得意なものは此角田川で有る。其シテが鏡の間に立つた時は、ワキの野島信は早、舞臺に居て、ワキツレは道行を謠つて居た。

其内衣裝師が笠をかぶせる、笛をもたせる、六郎は其笛を一寸肩にのせて見て、笠の具合をなほして、又笛をかついだ、此時梅若六郎なる人はなく、すでに年増の狂女に成つて居た、そしてポーとした聲で（オマーク）とよんだ。

（忠）



御幕

能の樂屋を見て何より神々しい所は。鏡の間である。鏡の間とは。橋掛より樂屋へ入るべき處の口を言ふのである。役者が立つて衣紋をつくろうて。御幕ッと一聲かける。此聲に御幕は上るのである。此圖は間狂言の大名が出る處を寫したものである。

（英　忠）

シテの樂屋入り

此の節は大分禮儀が亂れました樣ですが父の生前なぞは隨分八釜しいものでした。先づシテが幕に入ると、物着せが挨拶をする。面を取る。後見が面裏の息を拭きます、其の儘で囃方や地謠の挨拶を受けるのです之につきまして。面白い話しがあります。故人になられた、清之が、確か京都に能の有た時に石橋を勤めまして御存じの如く、石橋は働きの多いものですから汗だらけになつて、御幕に入りますと直ぐ衣裝を脱いで、スマシこんで居る處へ、囃方が挨拶に來ましてサー承知しません何故私共の挨拶を裝束のまゝで御受けにならんと怒りつけられたさうです其の事を清から聞いて居りますので、私などは大に注意を致して居ります。

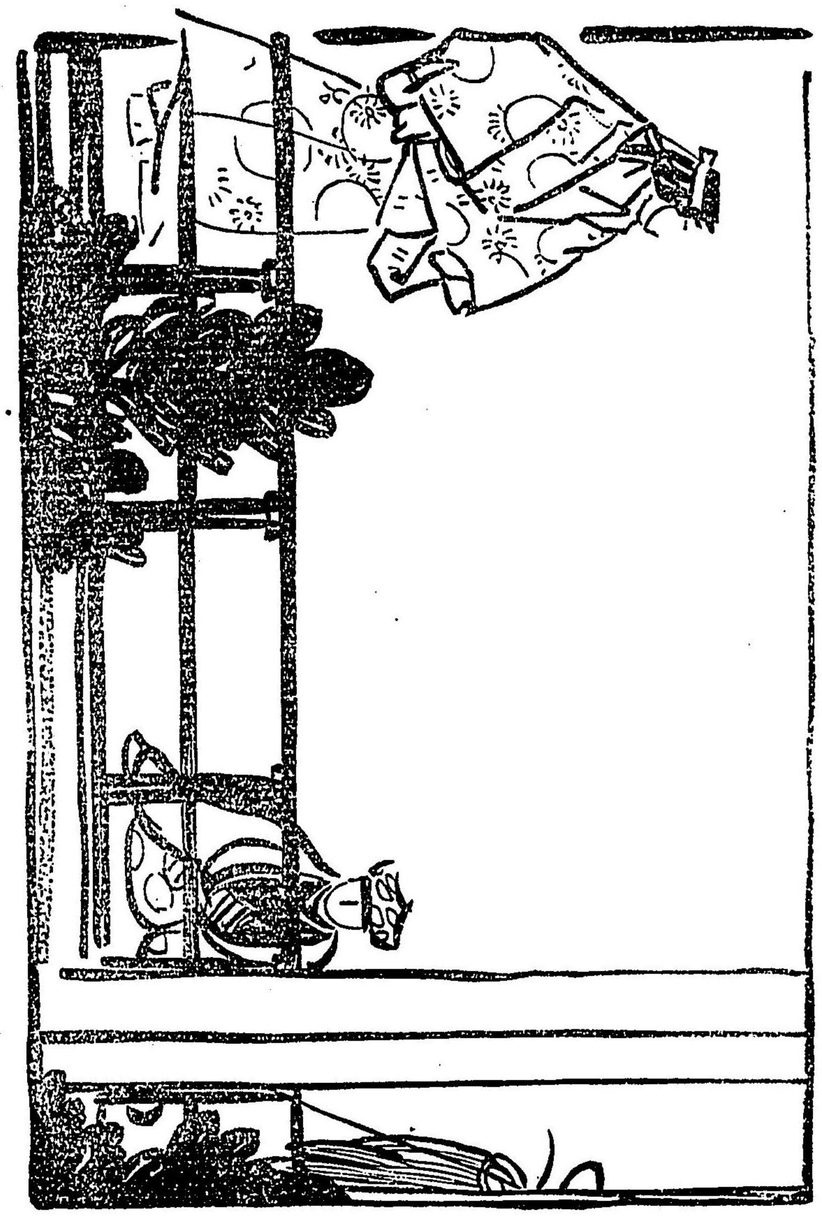
万三郎氏談

萬三郎の仕舞

（藤　戸）

萬氏は裝束を附けた時より、仕舞なんどの時の方が其容ちがまさつて居ると思ふ、肩から胸へかけては何とも形容の出來ぬ人體美をそなへて居る、藤戸の仕舞に、「胸のあたりを、刺し通し刺し通さるれば」と言ふ處がある其時私しは、さう思つた、あの大きな體からどうしてあのやうな、フワリ、とした形が出るだらうと。

（忠）

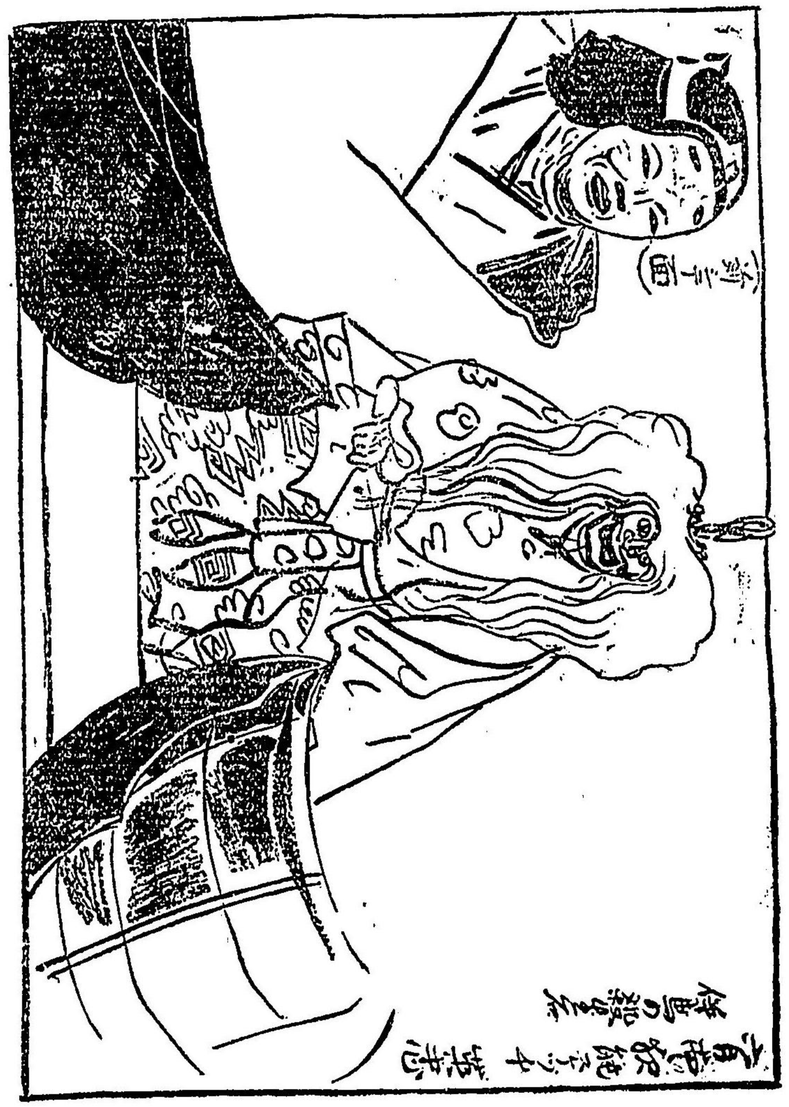


伴馬の殺生石

（四十三年六月十四日）

申分なき達者さではあるが、寄る年波は爭へず、伴馬の腰は餘程曲つた、若い者がアノ腰付で橋がゝりから出て來たら、嘸可笑しからうが伴馬のは可笑しくないから妙だ、なふ其石のほとりへな立寄り給ひその一句が如何に底氣味惡く響いたかは今でも耳について居る、此寫生の腰は餘程負分に伸ばしてあるらしい。

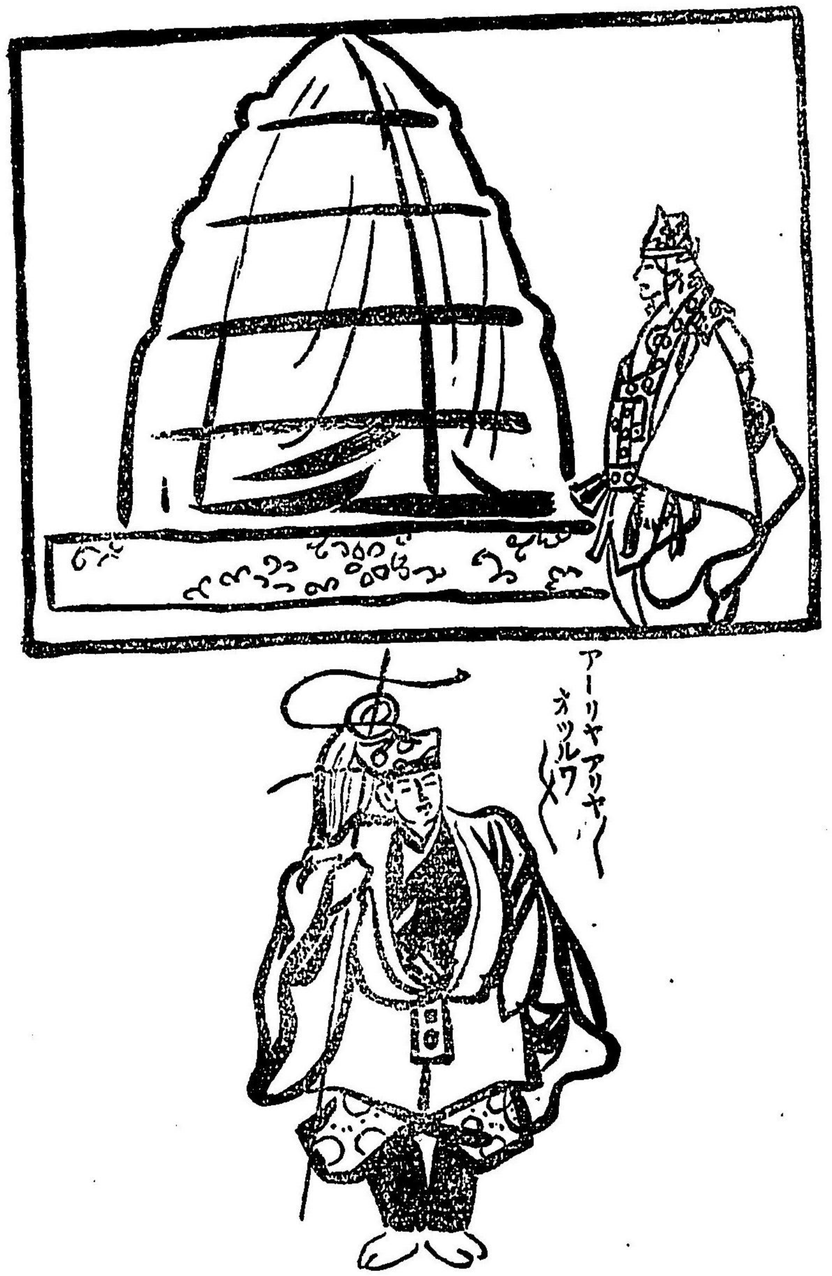
（雪　鳥）



同後シテ

白頭で型は普通より手數が少い樣に思はれたが、此繪を見て思ひ出す事がある、或雜誌に誰か此後シテの寫生を出した、夫を見た某子爵(半黑人の稱ある人)が殺生石の白頭に狐戴を頂く事はない、繪虛事だと嘲笑された、然し事實は伴馬が現に喜多家所藏の狐戴を借りて用ゐた事此寫生の通りである、由來事實は智識より權威がある。

(雪鳥)



同上脇と狂言

脇は東條であつたと思ふ、急々に去れ去れなどの叱り樣は此人の得意のところである、狂言は誰だつたか覺えぬ、或は吉野てゝもあつたかと思ふ、アーリヤアリヤ〳〵と口の内で唱へて見ると、幽かに吉野の聲が聞える樣にも感ずる。

（雪　鳥）

兩梅若の家庭

九段の能樂堂で。愛國婦人會の。何とか言ふ名義の元に梅若一門と。二三の御前樣がまぢつた催能のあつた時地うらの見所に居られたのを。失禮ながらスケッチした。其後萬三郎氏に合つた時此間の寫生は。ときかれたよく御存じですナーと言ふたら。能を不見に右手の方ばかり御覽でしたからと。大いにわらわれた。

四十四年六月十一日の寫生

（忠）

脇師のスケッチ

大友老人は十徳でも着せて、撫火鉢を宛がつて置けば、上品な五千石位のお旗本の御隠居には見えるが奈何せん、舞臺に立ては振はない、野島の口が耳せゝまで歪んで行くのは眞似の出來ない藝で新が下唇を開いてくゝり顔に倘一段を添へる所は粹な味がある。若し夫れ東條が入歯を氣にしながら、字義通りに口角沫を飛ばす所は、蓋し素面のシテを弱らす事一通りではあるまい。

（雪　鳥）

素人能

之は多分能樂堂での愛國婦人會が何かの素人能かと思ふ。見なかつたから分らないが、井伊伯の忠度は「彼の六彌太を取つて押え」で盛んに一流の活動を試みられた事だらうと察する。溪泉氏の仲光は例の愁傷の舞でゝもあつたであらう、此能は大嫌だから、見なかつた事を遺憾には存じ申さぬ。近藤男には未だ一度も舞臺の人として拜顏した事がない六郎の後見にいたつては御くろう樣である。

（四十四年六月十一日寫生）

（雪　鳥）

萬三郎集

英忠君の萬三郎好きといつたら評判になる位、女にしたい位の優男だから若しかすると訝しいせなどゝ朝日の編輯でワイ〳〵いつて居る、其位だから寫生となると萬三郎のが一等よく似る、見ないで書いても萬三郎の型なら何時でも呑込んで居る、從て時としては實際より良く書いてしまう事もある、見る人は眉唾の必要があるかも知れぬ。

（雪鳥）

上より。安宅のシテ。遊行抑の前シテ
素謡の時。後見座居る時。地に居る時。小面を付けた時

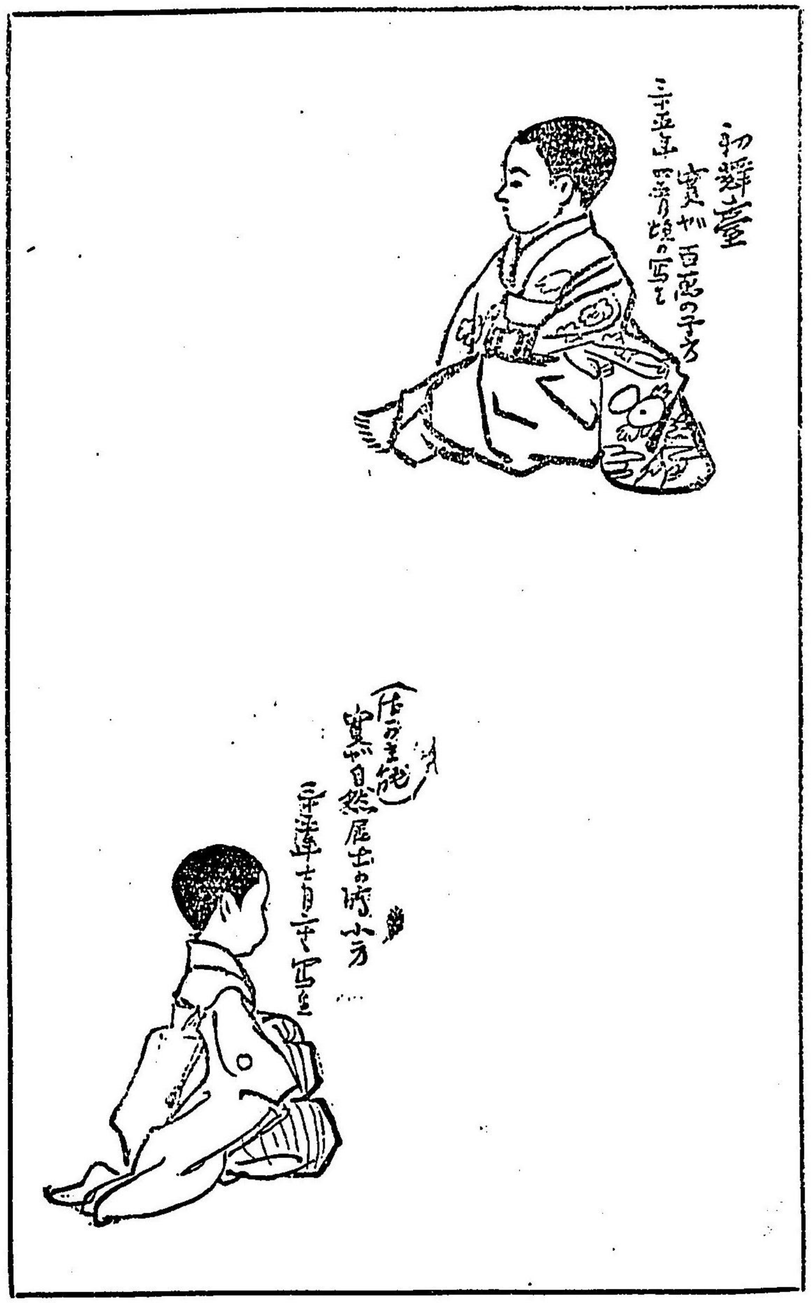
梅若美雄（其一）

私しが梅若美雄を初めて見たのは三十五年の五月であつた、當日の番組は實の百萬、萬二郎の班女六郎の松風故鐵之丞の盛久等で美雄は百萬の子方をつとめた之れが美雄の初舞臺で梅若の見所は此一少年のために皆喝采をした。

何んでも當日は非常にむし暑い日で美雄の顏から汗がだら〳〵と流れる地に居た六郎がぬれたきれで時々ふいてやつて居たのをおぼへて居る。

二度目の舞臺は同年七月であつた之れはほかま能の時で實翁が自然居士の時の小方であつた故大和田師は私しに此んな事を言ふた梅若も盛んなものだ又々未來の太夫が一人殖えたと。

（英　忠）

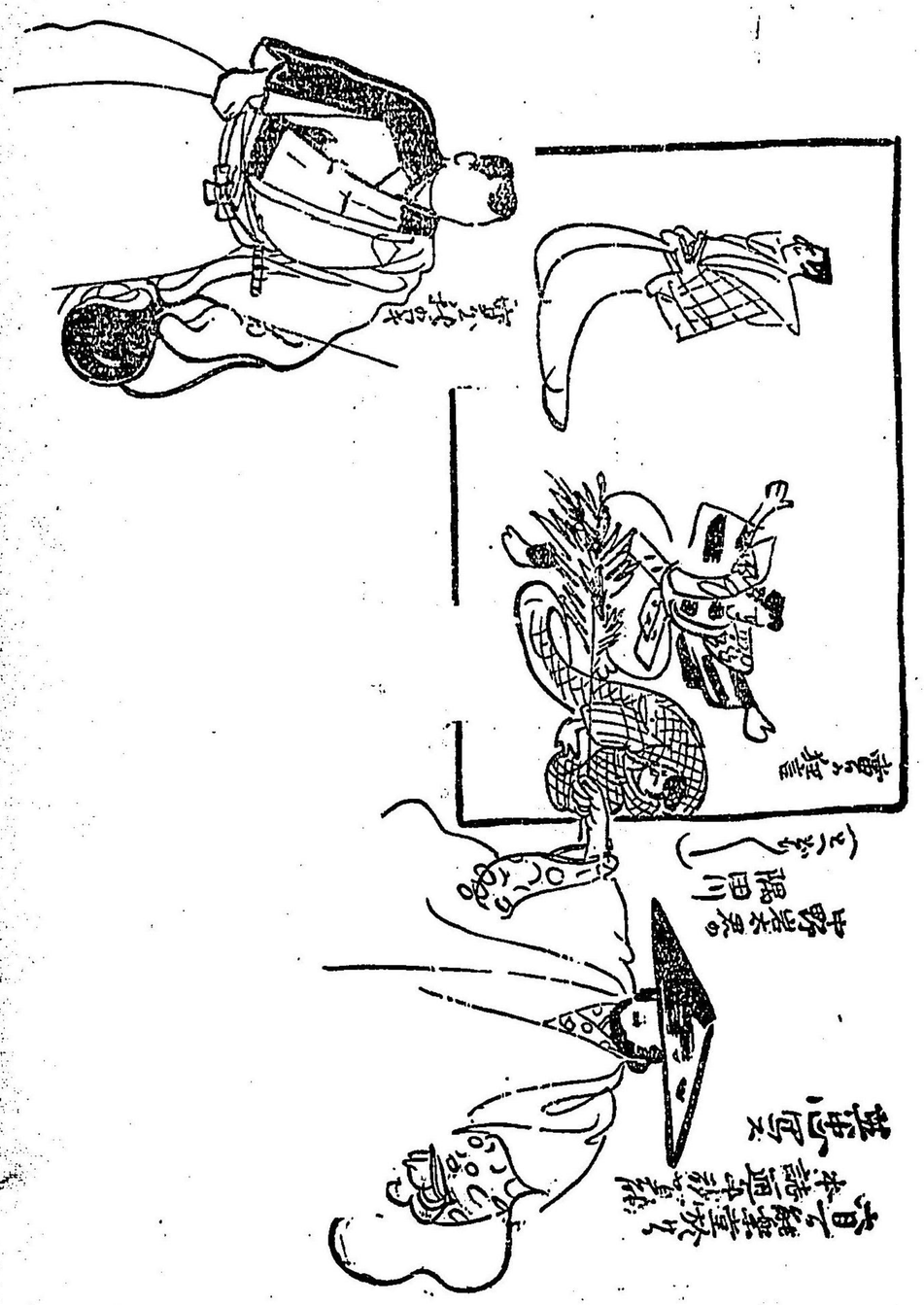


梅若美雄 (其二)

思出すと早いもので百萬の小方を勤めた美雄が、今は土蜘のシテや吉野天人や清久の後見迄やる。

私しは美雄の樣にオットリとして居る樂風がすきだ場あてをやらぬ、コセツカぬ之れが梅若美雄を大家のたまごだと言ふ連中の見ころであらう。

(英　忠)



素人能

中野岩太氏は素人の實生大夫といはれて居る人である、此日の能は自分は見なかつた樣に思ふが、脇は貫五郎でゝもあらうか、餘計な事だがシテの笠は少し變だと思ふ、實際斯ういふ形の笠を被つたのかしら。

（四十三年六月一日）

（雪　鳥）

素人能

（同　前）

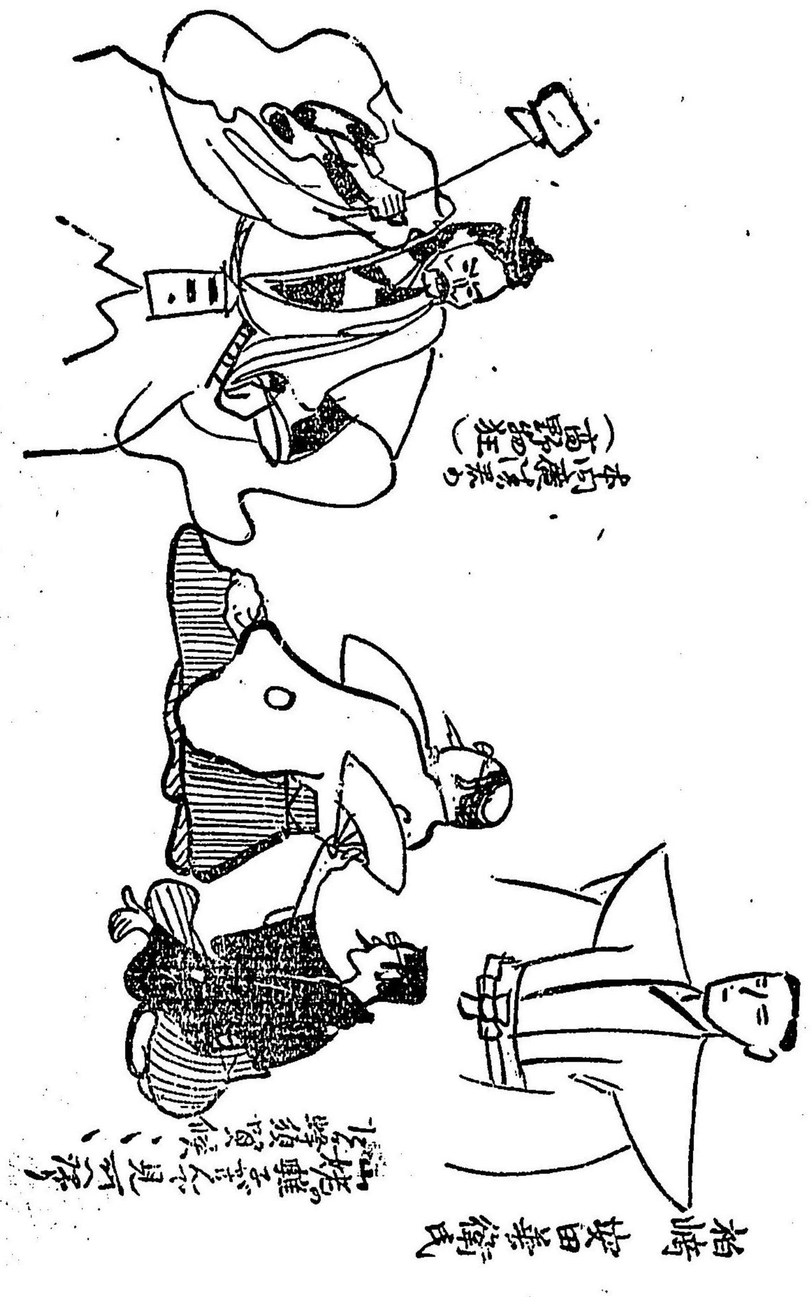
蜂須賀侯は能樂會長で寶生流の熱心家である。然して其藝たるや天眞爛漫たるもので、此書にに見えないが金指輪、金鎖、が看板の金眼鏡と相映して實に光彩陸離たるものである、最賀氏は觀世の曉將で新進家中の筆頭で其型は他く迄鮮麗である　古市三井などの卒業生を除いたら此人が先づ目に着く樣である。

（雪　鳥）

素人能（同前）

原告水氏は三井お抱の脇師で、上掛り寶生を謠ひ乍ら新について脇の型を稽古して居る、非常な上手とまでは見受けられないが特に鉢木の脇などは新のが誰が目にも殘つて居るから益々見スボラシク見えた、五堂先生は英忠氏の彫刻で蓋しロダンの壘を磨するものである。

（雪鳥）



素人能

(同　前)

寶生倶樂部主事本間廣清氏曰く

河合英忠といふ人は僕に何か恨みでもあるのか、何時も骸骨が衣裳着けた樣にばかり僕の繪を書く。

と御本人は一廉の好男子を以て任じて居るのに、畫家の惡戯茲に至つてお氣の毒に堪へぬ。

(雪　鳥)

素人能

高島彌五郎送別會の能があつた、三井溪泉氏の鉢木は氏としては上出來でなかつた、ツレの織雄(今の鐵之亟)が喰つてしまつた、ワザ〳〵此處に美人を書き入れた英忠君の皮肉さは……。

(四十三年十月十五日)

(雪　鳥)

見所の聞書

△「アレが今度觀世宗家清廉の跡を襲いだ清久か、品格はあり謠は巧し頼母しい若太夫だ、何うか故障なしに成人させたい」○「同感々々」△「金剛の家元鈴之助君、相變らず淡泊とした藝風、僕は此人の仕舞には何時も感服させられるよ」

○梅若萬三郎先生の安達原、何と云つても堂々たる名太夫、凄い程の出來と申します」△「大阪の大將亮太郎君の安宅、體格偉大、立派に見えるだけが德さ」

○東條照映老の安宅ワキ、脇寶生の元老、先年寶生九郎翁退隠の時の安宅にも此人が選に當つた名譽のワキ、道がに老功の滋味は若手の及ばぬ所がある」

△大層氣に入つたね。

△　○

（笑　月）

萬三郎の安達原

（後）

故清孝追善能に新小川町の舞臺でつとめた時の寫生である萬三郎が當代の名人で有る事は能をあぢあふ人は皆同感であらうから此處には唯當日着附にの說明をして見やう。

厚板は赤地に金の龍文むらと郡青の雲所々々に綠青の山をちらしてあつた腰卷は白郡ねず地へ青金の大立ワク其上に雨龍と雲の丸物腰帶は黑と朱の雲であつた。之れがふりみだしたる黑頭調和して自然に得たる色彩の妙にはすくなからず感服させられた。

（英　忠）

梅若龍雄の夜討曾我

龍雄は萬三郎の三男、今年漸く八歳、此の畫は四十四年九月八日梅若の舞臺で夜討曾我の五郎を勤めた時のです。

夜討曾我の一節

「あらおびたゞしの軍兵やな。我等兄弟討たんとて。多くの勢は騒ぎあひて。こゝを先途と見えたるぞや。十郎殿々々何とて御返事は無きぞ十郎殿。「宵に仁田の四郎と戦ひ給ひしが。さてや早や討たれ給ひたるよな。口惜しや死なば散を一所とこそ思ひしに。物思ふ春の花盛り散り〳〵になりて此處彼處に。かばねをさらさん無念やな……。

夜討曾我間狂言

アド「是は如何な事。申し〳〵偽りで御座る〳〵。シテ「助けて呉れい助けて呉れい
アド。「申し〳〵氣をたしかに持たせられい。切れては御座らぬ。偽りで御座る。
シテ「何ぢや切れてはない。それは誠か。アド「誠で御座る。シテ「眞實か。アド「一定で御
座る。シテ」やいそこな者。切れてもないに切れてあるというてよい膳をつぶさせ
た。アド「我身の切れたか切れぬかを知らぬといふが有る物で御座るか。やあ〳〵
それは誠か眞實か。さて〳〵苦々しい事ぢや。シテ「なふ〳〵何事をおしやる。アド
「そなたの聞かせらるゝと膳をつぶさせらるゝに依つて聞かずとも置かせられ
い。シテ「それはいよ〳〵心がゝりぢや。平にいうて聞かさしめ。アド「それならば言
うて聞かさう、かの曾我兄弟の者が。シテ「兄弟が。アド「そなたを切り漏らいたが殘
念なというて今是へ切つて參ると申す。私は戻りまする。シテ「なふ〳〵そなたが
戻ては身共が切らるゝ。何とぞ連れていて呉れさしめ。アド「是はいかな事。そな
たを連れてゆくと私も切らるゝに依つて是はなりませぬ。シテ「日頃心やすうする
は何の爲ぢや。何とぞ連れていて呉れさしめ。アド「心やすいも事による。何と命
がけの事があるもので御座る。私は戻りまする。シテ「何とぞ連れていて呉れいの。
アド「いや〳〵なりませぬ。シテ「是非とも連れていて呉れい。アド「どう有つてもなら
ぬと申すに。なふ〳〵恐ろしや只のけ只のけ〳〵……。

明治四十五年二月十九日印刷
明治四十五年二月廿二日發行

定價 金七拾五錢

著作者 河合英忠

發行兼印刷者 東京市神田區錦町三丁目三番地 小林慶

發行所 東京市神田區表神保町一番地 小林書店

發行所 東京市神田區錦町三丁目三番地 嵩山房 (振替東京六〇六九番)

印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地 博文館印刷所

不許複製

(大賣捌)

東京 林六合館
同京 瀬京書店
同名古屋 星野書店

大阪 小澤自架堂
同京都 若林茂一郎
名古屋 東枝律書房

大阪 大久留米堂
同京都 前川善兵衛
名古屋 竹金文堂
同東京 長野太郎
同大阪 清國大迷
同名古屋 西澤宮太郎
同東京 大阪屋書店

342
12